
戦う魔王様!?

かりうむいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦う魔王様!?

【Nコード】

N0618Z

【作者名】

かりうむいおん

【あらすじ】

諸々の理由で、勇者一向に紛れ込んだ魔王様。しかしその勇者がアレな人で……。勇者×魔王だけこんな攻めでいいのか?、なコメディ。一般向けですので性描写が入りそうになると、時間が吹っ飛びます。気楽に楽しめる話にする予定（未定）ですのでよろしくおねがいします。

血迷った選択（前書き）

イメージでは昔読んでいたような、少女漫画＋少年漫画＋BLなコメディです。疲れたときに読むと元気になる話を目指す予定です。

一般向けBLの方が良いのかなと最近書いていて悩んだので、こちらにも投稿することにしました。

はじめは設定の関係上、ちよった暗めかもしれませんが。

血迷った選択

「久々の獲物だ、逃がさないぜ！」

「キャーーーー！」

悲鳴を上げて逃げ惑う美少年約二名。

それを追い掛け回す剣を腰に下げた変態。

ちなみに、この変態は勇者である。

「H A H A H A、捕まえたぞ！。さあこれから俺と一緒に愛の楽園へ……」

「……レオン、いい加減にしろ！」

そう、カノンは魔法の杖で勇者レオンを殴って気絶させた。

とりあえず、逃げ惑っていた美少年には、すみませんと謝り、勇者レオンを回収していく。

そして、気絶したこのアホ勇者をずるずると引きずりながら宿へと戻る。

この分だと地面との摩擦でまたズボンが破ける事になるだろうが致し方ない。

お金の管理をしているカノンには頭が痛い話だ。

——何故僕がこんな事を……。

幾度となくした自問自答を再び繰り返し、カノンはうんざりする。答えは決まっている。

それはカノンが勇者レオンの“幼馴染”だからだ。

——やっぱりアレだ。事前の下調べを面倒だったからしなかったのが敗因か。

初めて会った時、結構骨のある奴でこいつなら良いかも、と思ったのに。

なのに、まさかこんな奴だなんて。

幸いカノンの事は“幼馴染”だからだろう、対象外なので口説いたりはしてこ無い。

カノンはフードで顔が見えないようにしているが、本当はきらめくばかりの美少年なので真っ先に口説かれると予想される。

なのにそうならないのは“幼馴染み” フィルターのおかげだ。

そしてそもそも、勇者本人が自分で言っていたのだから、間違いないだろう。

はあとカノンは溜息をつく。

いかんせんこの勇者は弱過ぎる。

というか、美少年やら美少女やら美熟女やら美しき紳士やらを口説く前に剣の練習をしろと。

あの時は、もっと強い勇者だと感じたのに。

とんだ見込み違いだ。

はあと再び溜息をついて、宿の扉を開ける。部屋には勇者の仲間がいるはずだ。

カノンは魔法使いとして彼らの仲間の一員をしている。

ついでお金の管理も。一番カノンが安心出来るからと、勇者レオンに渡された。

その時カノンは思った。

こいつの安心出来るは絶対信用しないと。

もう一回カノンは溜息をついた。

現在勇者達は魔王を倒す旅に出ている最中だった。

ちなみに、カノンは魔王である。

呻くように頭から血を流し睨みつける勇者。

すでに他の二人の仲間は、瀕死の重症だった。

そんな絶体絶命の勇者を、魔王カノンカースは不敵に見下ろした。魔物の瞳である金の瞳に宿る冷酷さと傲慢さが見て取れる。死神とも言えそうな黒い衣装に、銀色の長い髪。

恐ろしく整った美しい容姿が、更にかの魔王の恐怖を引き立てていた。

「何だ、お前はこの程度か？」

「まだ……俺はまだやれる!」

勇者はふらつきながらも立とうとして、膝をつく。既に勇者も限界だった。

その様子に魔王は嘲笑う。

「無理をするな、人間。元々人間が我ら魔王に勝とうなど、思いあがりも甚だしいのだ」

「……く、それでも、俺は……勇者として……」

「他にも多くの勇者がいるのだ。お前が倒れた所で代わりは幾らでもあるぞ?」

「……だからといって、ここで……諦めるわけにはいかない!」

そう、最後の力を振り絞るように勇者は剣を振り下ろした。

それを馬鹿にしたように魔王は笑い、結界で防ぐ。

その結界にはじかれて勇者が転がった。再び起き上がろうとするも、既に勇者にはそんな力は残されていないかった。

魔王が勇者の前にかがみ、頭を掴む。勇者の口から血が零れた。赤い血。

魔王は魔物としての衝動で、勇者の口を伝う血を舌で舐め取る。

それに僅かに勇者が目を見張り、魔王を凝視する。その様子に、魔王は笑う。

「……なんだ?、頬が赤いぞ?」

「……るさい、一体……何の真似だ!」

「旨そうだったので、舐め取った。それだけだ」

「!」

「非常に美味だったぞ?、お前の血は」

魔王は艶かしく勇者に微笑み、そのままもう一度その血を舐め取った。

そしてゆっくりと顔を離し、右手で勇者の頭を掴んだ。

それが痛かったのだろう、勇者が苦悶の声を上げた。

「さて、お前の記憶を少し読み、書き換えさせて貰う。なに、全てではない。それに、ちょっとした拍子に元に戻ってしまうものだから」

ら、それほど恐れるものではない」

「止めろ……やめ……」

必死に勇者が声を搾り出す。けれどそれに魔王は薄く笑みを浮かべるのみ。

「今のお前の力では勝てないと分かっているだろう？。なに、次に目を覚ました時には、この事は忘れている。そして僕の事を仲間の一人だと思っている事だろう。ふむ、お前の幼馴染に魔物とのハーフが……しかも死亡している？」

「やめ……違……」

「ではその者に僕は成り代わろう。短い間であろうが、よろしく」

「やめろ————！！」

そう叫んで、勇者は意識を失った。

その間に魔王は記憶の書き換え、および治療を仲間ともどもしてやる。

そして、瞳の色を、片方だけ金のままもう片方を青色に変化させて、魔法使いのような出で立ちに魔王は変装する。

元々、昔の話だが人のふりをしていたことがあるのだ。造作もない。

ローブのフードをかぶり、顔が良く見えないようにする。あまり容姿をさらすところくな事にならないのだから。

一通り変装が終わり一息つく。

そして倒れ込んでいる勇者を冷たく一瞥して、

「せいぜい利用させてもらおうでしょう」

そう、魔王はにやりと笑ったのだった。

後になって思えば、それこそが運のつきだった。

血迷った選択（後書き）

つづきます

お前はすでに絆されている

「あ、カノンちゃんお帰りなさい」

柔らかいピンク色の髪の、美少女のような少年イオが何やら弓使いの大人しい青い髪の青年トランの背中に葉を塗っていた。

「トラン、頼まれれば僕が治療したのに」

「ははは、トランは魔物が嫌いだからね」

「僕は魔物扱いか」

実際そうなんだけどね、とカノンは心の中で舌を出す。

そこで、イオがカノンが引きずっている物体Xに目をやる。

「あれ、レオンまた誰かをナンパしてたの？」

「ナンパなんて可愛いものなのか、僕は時々疑問に思う」

「まず直球で、やらせて下さい、だからね。そんな事を言ったら普通逃げるよね」

「何であんな……」

「カノンちゃんは昔から一緒なんでしょう？。知らないの？」

「……ある日突然あなってしまったまして」

「きつと、カノンちゃんが振ったのがいけないんだよ」

「あのね、僕はそういう対象にならないってレオンも言っていただろう！。まったく……どうしてすぐに恋バナにするかな……レオン、逃げるな、正座」

「はい」

大人しく正座するレオンに、カノンはお説教を始める。

勇者として、というか人としての、最低限守るべき常識として考えられるものをくどくどと耳にたこが出来るほど何度も話さなければならぬ。

何が悲しくて魔王が人間に説教せねばならないのだ。

「……わかったか？」

「わかった」

輝くばかりの眩しいレオンの顔を見て、カノンは理解した。

こいつ、絶対に分かっていない。

そこで、レノンの顔が近づいてきて、カノンの銀髪に触れる。

一瞬どきりとカノンはしてしまう。

いや、だって、レオンもあんなふざけたりしなければ、意外に整った顔をしていて、綺麗な金髪で、空を映した瞳で……って、いや、アホ勇者だ、アホ勇者。

そもそも人間ごときに魅了されるなど魔王として風上にも置けない。

しかも、この軽薄な奴に。

「ほら、鳥の羽が付いていた」

レオンの手には、黒い鳥の羽があった。

「あ、ああ……取ってくれてありがとう」

「いや、見えたから。でもカノンは付けたままでも良かったかも」

「何でだよ!」

「だって黒がカノンには似合うから」

無邪気にレオンが言うその言葉に、カノンはぎくりとする。と、

「駄目だよレオン。黒が似合うなんて、黒は死と夜を想像させる。

かの魔王もそうだしね。好きな子にはそんな事言っちゃ駄目だよ?」

「うん、分かった。でもカノンは“幼馴染”だから」

「そっか、恋愛対象にならないかあ」

にまにまとこちらを見るイオ。

何だ、何が言いたいんだ。

それに、どうして僕が少しがっかりしたような気持ちにならないといけないんだ。

わけが分らない。

「……それより、近くで魔物が暴れているそうだから、それで賞金稼ぎをしないか?。でないとしたら宿に泊まらない所か、朝食が水だけに……」

「さすがに植物みたいに、光合成して生きていけないよな……。カ

ノンも果物食べられなくなるし。今の時期、よく取れる果物がある
まり無いんだよな……」

一応相槌を打つが、カノンは魔王というか魔族なので肉食に近い
雑食である。

そのレオンの幼馴染の魔物とのハーフとやらは、魔族の中でも特
に珍しい種族で、基本果物しか食べない魔物である。しかもその見
目麗しさから、人にも魔物にも狙われるという可哀想な人型の種族
だ。

もつともかの魔族よりも更に際立った美しい容姿をしているのが
魔王を含めた高位の魔族だったりするのだが、それは置いて置いて。
「わかった。大切な“幼馴染”を飢えさせる訳にはいけないから、
俺、がんばる！」

「そ、そうか、分かった。じゃあ、僕は依頼を受けてくる申請をし
てくるから……」

そうほんのり頬を赤くして、カノンは部屋から小走りで行く。
どうも調子が狂う。

ここ一週間ほど一緒に居ただけなのに、その度に、カノンはレオ
ンの奇行に悩まされつつ、気が付けば突っ込み役をやっていた。

「えー、でもカノンちゃん、レオンのそういう役所だからね」

そうにこやかに笑うイオに、どう考えても記憶操作に失敗してい
るとカノンは気付いた。

だが今更記憶操作を再びするのも難しい。下手に齟齬が生じて、
全てが台無しになっては元も子もない。

そもそも、何故にこんなイオという踊り子と、猟師のトランが仲
間なのだ。

もっとうこう戦いに強そうな者を仲間にするものではないのか。
ちなみに仲間になった馴れ初めを聞くと、酒場で意気投合してこ
うなったらしい。

「俺、実力でのし上るタイプだから！」

良い笑顔でレオンに言われて、そういうつてが無いんだなとカノ

ンは理解した。

なので他に仲間を誘おうにも、レオンの奇行はすぐに有名になってしまい、そんな奇特な人間はいない。

もっと良識のある仲間がカノンは欲しかった。

ボケ役になりたい。でないと疲れる。

本当にレオンは変な奴だ。なのに、カノンがついもっと仲間を探してしまったりするのは、“幼馴染”という理由からだろうがレオンがカノンにとびきり優しいからだ。それにいい奴だし。

ああもう、自分は魔王だというのにどうしてこんな……。

カノンは、小さくやってられないと呟いて、その思いを振り払うかのように走り始めた。

カノンが部屋から出て行った後。

「それで、レオンちゃんは本当の所、カノンちゃんの事をどう思っているの？」

「どう料理してやろうかなと」

「……レオン、まだカノンちゃんを完全に捕まえていないでしょ？とらぬ狸の皮算用、って言うじゃない？」

「確実に捕まえるつもりだから問題ない」

そうにとレオンは笑ってみせる。

他の奴らを口説いているのも、全部カノンに気にかけてもらいたいためだ、と言ったらカノンはどんな顔をするだろう？。

「信じてもらえないんじゃない？」

「否が応でも信じざる負えない状況にもって行けばいい。俺はカノンが欲しい」

「……カノンは止めた方がいい」

「トラン、幾ら魔族が嫌いだからって……」

「あれは駄目だ。レオンも諦めた方がいい。辛い思いをする前に」
そんなトランに、レオンは、ははっと笑った。

「大丈夫だよ、あいつの事は本当に昔から知っている。だから大丈夫

夫なんだ」

それ以上、トランは何も言わなかった。納得していないなとレオンは思いつつ、さてと窓から顔を出す。

通りかかる人を物色してから、にやりと笑った。

「そこのお姉さん、ぜひ俺と……」

そこまでしかレオンは言えなかった。何処からともなく、兎の置物が落ちてきてレオンは気絶する。

それを見て、イオが思い出したかのように手をぼんと打った。

「そういえば、カノンちゃんがレオン対策魔法を設置したとか言っていた気がする」

いい嫁さんだねー、とイオは気楽そうに笑うも、すぐ傍のトランは元々の寡黙な性格もあるが黙ったままだった。

お前はすでに絆されている（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

次回更新は未定ですがよろしくお願いします

森のきのこはご用心

何故ここにはキノコの魔物しかないのだろう。

先ほどから延々と現れては腰？、を揺らしながら踊るキノコを切ったり、ナイフやら矢で突き刺したり、火炎系の魔法でバーベキューにしたわけだが。

「よし、これでしばらく食事には困らないな！」

レオンが山盛りになった焼かれたキノコの前で高笑いする。

確かにこれだけの量があれば当分食事に困らないだろうとカノンは思う。

但し、連続してキノコを食べる事に耐えられれば、の話だが。そこでイオが残念というように首をふる。

「残念だけどそうもいかないんだ。それ全部毒キノコだから」

「え？ 本当に？」

「だよね、トラン」

「ああ、その類の魔物は食べられない。確か養殖しようとして間違えて毒キノコの魔物を量産して、手に負えなくなったから放置したとか何とか」

そんな事で魔物が増えたのかと思うとかノンは頭が痛くなる。

ちなみにカノンは魔王なので魔物が増えるのは喜ばしいはずなのだが、現在魔王である事を隠しているので力が使えない。

故に襲われる。

それを差し引いても、どうしてこんなに嬉しくないんだろう。

「じゃあどうした方が良い？ 毒物を放置していいのか？」

「……勇者としての力で浄化すれば終わりです」

「そういえば、俺、勇者だったな。忘れていた……カノン、嘘です。だから杖を構えないで」

仕方が無いといったようにレオンが剣を構えて、そこでふとトランが何かを思い出したように言った。

「赤いキノコだけは、結構な高値で売れる。猟師の間では隠れた小遣いになる」

「じゃあ分けるか。宿代やら食費やら出るかな？」

ちよつとレオンは嬉しそうだ。そこで、ふとイオが気付いたように、

「トラン、これなんで高く売れるの？ 毒でしょう？」

「毒と薬は表裏一体。ただそれは、“大人”が嗜む物だ」

“大人”という下りにレオンが反応したので、カノンは杖で軽くレオンの背中をつついて牽制する。

しかしそんなレオンの行動など気付かず、イオが更にその意味を問いかける。

「……つまり？」

そこでトランがこぶしを握って言い切った。

「自分の中にあるエロ願望をひたすらしゃべってしまうという薬だ」

「聞いた事がある……。その薬により、数多のカップルが分かれたという伝説の……」

「ああ、恐ろしい薬だ」

そうトランは額の汗をぬぐう。

カノンは思った。こいつらがレオンについてきた理由が何となく分かった。

似た者だからだ。

となるとカノン自身も彼らに似ているという恐るべき事実が……。ないな。

それにそもそもそんな薬、どうでも良いじゃないか。

「……別に、エロ願望口走るぐらい、いいじゃないか。誰かを傷つけるわけでも無いし」

が、その言葉にレオンがやけに反応した。

「カノンは分かっている！ いいか、人間の脳内にある妄想が一番エロいんだぞ！」

だからどうした！、とカノンはツツコミ対願望を抑えつつ、そう

熱意を持って力説するレオンに、お前ならそうだろうなとカノンは溜息をついて、

「いや……頭の中にあるものを言葉なり、文字なり、絵なりで表そうとしても、その限界は存在する。そうでなければ言い間違いや聞き間違いは起きないはずだから……」

「うお、珍しくカノンがまともに話してる」

「……さっき散々説教した事を忘れてるみたいだから、もう2ターンぐらいお説教しとこうか」

「ああ、俺の繊細な心がそんなに怒られちゃうと硝子のように砕けちゃう！」

「繊細だったら少しは行動を改めろ！ うっかりこの前胃薬を買おうか迷ったじゃないか！」

胃薬常備の魔王ってどんなだよ、そもそも魔王って偉そうにしてればいいものなはずなのに、どうしてこうなった。

カノンは心の中でむせび泣く。と、

「ちなみに買ったのか？」

レオンがちよっと心配そうにカノンを見る。

心配されて嬉しいと思ってしまったカノンは、すぐさまその諸悪の根源がレオンだと思ひ出す。

なので少し恨めしそうに一言。

「……残金が」

「ごめんなさい」

「まったく……いっそ、レオンにそのキノコを食べさせて恥ずかしい思いをさせるかな。その方が薬になるだろうか……」

そこでイオが慌てたように口を挟む。

「だめ、カノンちゃん。それだけは絶対止めた方が良い！」

「イオ、でもそろそろレオンにお灸を……」

「もしもカノンちゃん、レオンにエロエロな感じで口説かれたらどうするの！」

「待て、イオ、何故俺が口説くのが罰ゲームになっているんだ？」

「そうだな。危なかった。イオ、ありがとう」

「……おい」

「どういたしまして。いやね、カノンちゃんにパーティ抜けられると本当に戦力的にきついからさ」

「……無視しないで」

「はは、それはどうも。でもイオの短剣の扱いは中々だと思っていますよ？」

「……あのー」

「本音を言くと、カノンちゃんの事気に入ってるから、いて欲しいなって」

「わー、嬉しいですねー」

ちなみに記憶操作する前に、カノンはイオをフルボッコにしていたりする。

そんな考えをおくびにも出さず、にっこりとカノンは微笑んだ。

そこで、耐えられなくなったのか、レオンが叫んだ。

「む・し・す・る・な———!!」

その言葉と同時に、特に大きい踊るキノコの魔物が現れたのだった。

「ふう、何とか倒したな。お？」

レオンの体が薄く光っている。

「これは……レベルアップの予感！」

カノンはこういう時は口に出さなくてもいいのでは無いかと思った。

一応黙って立っているだけで様になる容姿なのに、口を開くとどうして格好が悪くなるのだから。

そこでいつもと違い、白い粉がくるくると回って、

「あ、じゃあアレで。ええ、その技でお願いします」

そうレオンが独り言を呟くと、それは消え去る。

今までに見たことが無いので、カノンは問いかける。

「今の何？」

「ああ、技を覚えたんだ。どれがいいか選択したんだ」

「どんな？」

「うーん、強化系？、かな」

「どうして、？、がつく」

カノンは嫌な予感がしたのだが、そこでレオンがカノンに抱きついた。

「俺ようやくまたレベルアップしたよ、褒めて褒めて！」

「え、いや、あの……」

カノンは突然レオンに抱きつかれて、顔を真っ赤にしてどうしようかとおろおろする。

助けを求めるようにイオとトランを見ると、トランはいつも通りの無表情で、イオはにまにまと笑っているだけで助けるつもりは無いらしい。

「カノン、褒めてくれないのか？」

「……ああ、はいはい、いいいいこ」

頭を撫でてやると、レオンは更に嬉しそうにカノンに抱きついてきた。

それが嬉しいと思う反面、カノンは、これは“幼馴染”に対する好意なのだろうと悲しくなる。

何で僕がこんな思いをしなくちゃならないんだ、これも全部レオンが悪いとカノンは心の中で思ったのだった。

森のきのこはご用心（後書き）

読んでいただきありがとうございます。今日はもう一回更新したい

シリアスは歩いてくる？（1）

宿に戻ってからふとトランが思い出した様に付け加えた。

「そういえばあのキノコ、酒につけて売ったほうが高く売れるんだよな」

そんな訳で手分けして、酒と漬けるための瓶を買いに行ったわけだが。

「酒が売り切れ？」

すぐに任務から脱出しようとするレオンの襟首を掴みながら、カノンは酒屋の親父さんから聞いて首をかしげる。

「……お酒は作るのに時間がかかりますよね？　それがこれから数ヶ月無いつて……何故売り切れなのですか？」

「いや、なんでも有名な勇者御一行の戦士が無類の酒好きらしくて、全部買い占めていってね」

「全部買い占めてって……樽の跡を見た限り、20以上……」

「ちなみに二段に積んであったんだがね……」

「それ、全部一人で飲むのですかね？」

「そう言っていたな」

親父さんとカノンは沈黙する。どう考えても人間の体に入る量じゃない。

「まあ、有名な勇者様達だから、そういう事もあるのだろう。じゃあそろそろ店を閉めるから……もしも五日後でいいなら、隣町から仕入れて数本は用意できるが？」

「あ、いえ、そこまではいいです。ありがとうございます」

「そうかそうか、所でお嬢さんは、ここにいつまで滞在するんだい？」

唐突にお嬢さんといわれてカノンは、目が点になる。

「あの、僕は男なんですが」

その言葉に、親父さんはえっという顔をして慌てたように、

「え？ あ、いやすまない。あまりにも別嬪さんだったもので……最近美少年やら、美少女やらが攫われる事件が多発していてね。その半分は魔族の仕業らしいが……」

「残り半分は？」

「人買いだよ。そういうのは魔族にも貴族にも高く売れるからね。それに最近、そういった美少年やら美少女所か、年をいった人まで声をかける変態勇者が出るそうだから気よつけたほうがいい」

最後の下りはうちの勇者ですとは言えず、カノンは黙って頷いた。そして、ふと自分が掴んでいたレオンの襟首がやけに軽いことに気付く。

よくみると、服だけになっていた。

「あーいーつーはー」

「さつき、こそこそ上着だけ脱いであっちに行ったら、今から追いかければ間に合うんじゃないかな？」

「教えてくださいよ！」

「いや、何となくこの前、妻に趣味で高い模型を買ったことがばれた時に似ていて、つい」

とりあえずカノンはありがとうございました、と酒屋の親父さんに挨拶して走り出したのだった。

そんなカノンを見ている人影に、カノンは気付きつつも無視したのだった。

「お前のようなのが勇者だと？ 笑わせるな！」

ちよっと大きな目の通りに人ばかり。それと怒声。

カノンは非常に嫌な予感を覚えて、人だかりを覗き込むと、案の定レオンが居た。ついでにイオとトランもいる。

大きい野生的な筋肉質の男、背中に巨大な斧を背負っている。その男が今の言葉を発したのだが、それに対してイオが食って掛かった。

「そっちこそ、そんなヒョロヒョロのにこやかな勇者で大丈夫なん

ですか!」

「お前……ホーリィロウ様に、なんて事を!」

「ふん、レオンの事を馬鹿にする奴は僕が許さない。トランもそうでしょう?」

「ああ、貴方方にとってはレオンは矮小な存在に見えるかもしれないが、これでも我々の大事な勇者です」

「それでも、という言葉に反応したレオンだったが、

「所で魔法使いはいないのか?、やけに美人だという話だが?」

「ここにいますよ!」

カノンは人だかりを飛び越えて、一番前面にすんと飛び降りる。そこで、戦士が少し殺気立つ。

「魔物……か?」

「ハーフです。所で僕は途中からですので何があったのか教えていただけますか?」

「その勇者が打ちの僧侶をナンパしたんだ」

「ごめんなさい。跡でたっぷり言い聞かせておきますので、許していただけないかなと……」

「許せるか! 見ろ、僧侶の奴が怖がっているじゃないか!」

指差す先には白装束を纏った、くすんだ銀髪の少年が、彼らの勇者の後ろで顔を赤くしてレオンを見ている。

その子は、カノンと目が合うときと睨みつけて、俯いた。

これはひょっとして?。

「……もしや、僧侶の方はレオンに一目ぼれを……」

「するわけが無いだろう! あいつが大人しいからって好き放題やつて……」

「レオン、あの子に何やった?」

それにレオンが困ったように、

「いや、道を聞かれたただけだが……」

「よくそんな嘘を!」

憤る戦士を、そこで勇者ホーリィロウが宥めた。

「まあまあ落ち着いて。僕達だって鬼じゃない。その償いをしてもらえればいいさ」

「償い……なるほど、そちらが本来の目的ですか」

「人聞きが悪いな。僕は君に仲間になって欲しいのに」

そう、ホーリィロウがカノンに手を伸ばす。それを人影が遮る。

「レオン？」

「……カノンは俺の“幼馴染”で仲間です。貴方にお渡し出来ません」

「君はそうかもしれないけれど、カノン君か、彼はもしかしたならこっちが良いかもしれないよ？」

「お断りします」

カノンは、ホーリィロウを見て即座に言い切った。

それに、レオンはちよつと驚いたような顔をして微笑んだ。

対するホーリィロウは相変わらず不気味なほどにこやかなままだ。

「これで話は終わりです。それでは……」

そういつてカノンの肩に手を回して背を向けるレオン。

肩に手を回された時、必然的にレオンにくつつくような形になり、レオンの体温を少し感じてカノンはどきりとした。

そこで、カノンの腕が引っ張られる。

「僕に触るな！」

とっさにカノンは振り払った。目がホーリィロウと合う。

その瞳に宿る不穏な気配に、自然とカノンも挑戦するような好戦的な気配を瞳に宿す。

「……やっぱ君はそういう顔の方が綺麗だね」

「お褒め頂ありがとうございます。それでは僕は失礼します」

「でも、僕達に喧嘩を売って、ただで済むと思っているのかい？」

「そちらが仕掛けてきたのでしょうか？」

「さて、何の事だか。……けれど、僕たちが本気を出せばどうなるか分かっているでしょう？ レオン様？」

名前を呼ばれて、レオンが立ち止まり振り返って睨みつける。

「……それで、俺達にどうしろと？」

「カノン君を賭けてゲームをしないかい？」

「生憎だが、カノンを商品にするつもりは無い。カノンは物では無いしね」

レオンが問題外だと言い切る。少し怒っているようだ。

でも、こういう時の顔をカノンは今まで見たことがなかった。

思いのほかしっかりしているというか、頼りになるというか……。

こんな顔で口説かれたら、誰でも一発で落ちるだろうに。

本当にレオンは残念だよなど、人事のようにカノンは思った。

そして、カノンの事を物じゃないからとかまったく、だが本当に仲間思いなレオンにカノンもほんの少しだけ手助けしたくなる。

きつと、ここで敵対するのはレオンにとっても良くないだろう。だから、

「いいよ、僕が相手になってやる」

「カノン！」

レオンが慌てたように叫ぶ。そして、イオも、

「カノンちゃん、考え直したほうが良い。あいつらの仕掛けてくるゲームってカードゲームなんだけど、今まで殆ど負けたことが無いんだ」

「ふーん。カードゲーム、ね。イカサマしているって事？」

「それは俺を侮辱しているのか？。そんな事せずとも光の神の加護を受けている僕達には、そんなものは必要ない」

そう自信満々に言い切るホーリイロウにカノンはふふと笑った。

それに、カノンは不敵に笑い返す。

「イカサマを見つけたら、貴方の負けですよ？」

「余裕だね。それだけ自信があるのかな？」

「ええ、もちろん」

カノンと心配そうな、イオとレオン。そこでトランが、

「カノンが大丈夫だといっているんだ。何か考えがあるのだろう。今まで旅をしていて、言ったことだけは必ずやる奴だと俺は知って

いる」

その言葉に、イオとレオンが黙る。

「話はまとまったかな？」

微笑みかけるホーリイロウ。

そんな彼がカノンには滑稽で仕方が無い。

今自分が相手にしているのは誰だと思っているのだ？。

シリアスは歩いてくる？ (1) (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

あと一回今日は更新できるかな？

シリアスは歩いてくる？ (2)

「うーん、困ったね。イカサマしたのに負けちゃった」

ホーリイロウが全然困っていないように頬をかく。深刻そうな雰囲気は一切見て取れない。

ちなみに彼の目の前に座っているカノンは、肩透かしを食らっていた。

「……普通に屈折を利用して全てのカードを見ているだけですか？」
「じゃあ君ならどうする？」

楽しそうに聞いてくるホーリイロウに、カノンは笑って肩をすくめる。

「全部同じ柄のカードで神経衰弱、加えて僕が先行かな？」

「……それはゲームにならないよ？」

「僕は安定志向なんです」

仕方ないな、とホーリイロウは微笑んでレオンを見た。

「カノン君は君達のものだよ。今回は僕の負けだね」

「……こういった事はやめて欲しい。特にカノンに……」

「いや、凄く魅力的だからね。“幼馴染”だったっけ」

ふふと獲物を狙うような目でカノンを見た。

そんなカノンをやらないぞというようにレオンは後ろから抱きしめる。

そんな二人の心情などカノンは全然気付かず、本当にレオンは仲間思いだなと思っていた。

二人はカノンの心中など知らず、レオンはホーリイロウを睨みつけて、

「それより、もう金輪際近づくな。でないと悪評立ててやる」

「いや、僧侶を惚れさせた君が悪いだろ。戦士は僧侶の事が片思いなのに」

さらっとホーリイロウがばらして、戦士が噴出した。

「ホーリイロウ様、何故ばらすのですか？」

「いや、レオンに僧侶が一目惚れするとは思わなくて。戦士がレオンに下手に突っかかれても困るし」

「しかし……」

「……いいね」

ぴりりとした殺気が放たれて、戦士が黙る。

その殺気にカノンは酷く反応してしまうが必死で抑えた。

今すぐ狩るか、といった衝動があるものの、レオンに後ろから抱きすくめられる力を強くされて、無理、と思った。

なんだろう、レオンが触れているだけでカノンはときどきする。

それを悟られる方が怖い。と、

「まったくカノンがいるから、お金の管理しなくて楽なんだから、やらない」

「それが理由か！」

下からパンチを繰り出すも、それをレオンは容易に避ける。

「はははは、遅い、遅いぞ！」

「く、着々と逃げる能力だけ上がってる。だが……」

カノンは暗く笑った。

まさかそんなどうでも良い理由で引き止められているとは思わなかった。

がんばった……いや、それほどがんばったわけではないが、そんな自分が馬鹿みたいだ。

だから、憂さ晴らしさせてもらおう。

「いいだろう、その腐った性根を根本から叩きなおしてやる！」

そう、土煙を上げつつものすごい速度でカノンはレオンを追いかけteいったのだった。

後に残った、イオとトランの二人はそれを見送って。

それからくりとその有名な勇者ご一行にイオは言った。

「ついなのです、その酒樽を一つ譲っていただけませんか？」

「は！ 美人な気がする、その綺麗なお姉さんて……」

「あらん、わ・た・しの事？」

後ろから見た時には分からなかったが、振り向いた顔は、明らかに男で、美形で無くて、女装しているのはまだ許せるとして、全体からかもし出される雰囲気も含めてレオンは本能的に感じた。

こいつは攻めだど。

「チェ、チェンジで……」

「ふふふふ、最近こちら辺を騒がせている美形の変態勇者さんが引つかかったわ。お持ち帰り♪」

「やめ、俺は受けじゃない！」

しかしすぐにそのお姉さんのようなお兄さんの肩に担がれてしまう。

「大丈夫、誰もが初めはそう言うのよー。すぐに可愛がってあげるわねー」

「……何故に女言葉」

「馬鹿が引つかかるからよ、うふ」

「いやー、あ、カノン助けて……」

雨の中の子犬のような目で、カノンに助けを求められるが、カノンはにこやかに手を振った。

「ザマーミロ」

「ひ、酷いって……カノンに手を出したら許さないぞ？」

そこで、お姉さんのようなお兄さんがカノンをレオンとは違う方の肩に担ぎ上げる。

敵意が無いの油断したカノンはじたばたと暴れる。

「ちょ、何で僕まで担がれて……」

「あー、物騒なものに手を添えないでね勇者様。心配しなくても依頼が有って……俺はギルドの者だよ」

と、そのお姉さんのようなお兄さんは告げたのだった。

ギルドは、一言で説明すると依頼を受ける場所である。元々キノ

この魔物を倒したので、依頼達成としてお金を貰いに行く必要がカノンには有ったので手間が省けた。

簡素な応接間に通されて、香りの良い紅茶が出された。

「最近、美人さん達が攫われる事件が多発していてね。あの格好で引つかからないかと試していたのだ」

「……心臓に悪いのでやめてください」

「実は結構君、タイプなんだよね」

レオンがカノンの後ろに隠れた。それはいいとして、

「それで僕達は何を？」

「ああ、魔王の配下、四天王が一人風の王が住まう城があるのだが、そこにいる美人さんを帰して欲しいんだ。一応勇者だし、この位だったら、かの魔族に相手してもらえと思うんだ」

「生きて帰ってこられるレベルだから、ですか」

「評判は散々だが君達のレベルは中々のものだよ。そうすれば、人買いの方の対処に専念できる。本当にここは小さな町なので人手不足なんだ」

はあと溜息をつくお姉さんのようなお兄さんにカノンは頷いた。

「僕達でよければ、ぜひ依頼を受けさせてください」

「助かるよ、依頼料はこれくらいで？」

提示された金額も、中々良い。というか凄くいい。これで当分宿代と食費に困らない。

神様ありがとうとカノンは思った。

ちなみにカノンは魔王である。

「……本当に俺達のレベルでどうにかなるのか？」

レオンが珍しく、真剣な表情で聞き返す。

お姉さんのようなお兄さんは、数回目を瞬かせて、意味深に笑った。

「……大丈夫ですよ。貴方方なら」

「カノン、依頼を断ろう。止めた方がいい」

それにカノンは必死になって首をふる。せっかくのチャンスなの

だ。こんな機会めったに無い。

「嫌だよ、お財布係の僕は、見過ごせないよ」

「いいから止めろ」

「何で急にそんな……僕は受けるよ。ここにサインすればいいんだね」

とレオンの反対を押し切って、サインしてしまう。

「はい、契約成立ですね。もし破ると違約金がかかるので、注意してください」

「……わかった」

レオンが珍しく溜息をつく。

けれど、これはカノンにとって渡りに船なのだ。だから、逃すわけにはいかなかった。

「カノンちゃん、レオンもお帰り。お酒分けてもらって、作っている最中だよ」

「……イオ、一つ聞いてもいい？」

「なあにー」

「……僕が夢を見ているのかな、樽の半分ぐらいまでお酒が減っているんだけど」

「夢じゃないよー。さっきトランと飲み比べして、僕が勝ったからねー」

「商品に手を出してどうするんだ……そういえば二人がお酒大好きなの忘れてた。はあ、原料だけだと買い叩かれるんだよね……でも他に代わりが無いから、いけるか？」

そう、キノコの山を見詰めてカノンが嘆くと、イオが唐突にカノンに襲い掛かった。

「酒は飲めども飲まれるな……てね」

「や、ちよつ樽ごとは……らめえ——！！」

カノンは樽に放り込まれた。ざぶんと酒が飛び散る。これでもう酒は使えない。そもそも、

「大丈夫か、カノン？」

笑い転げるイオを尻目に、レオンが様子を見ると、酒に漬かったカノンがレオンを見上げた。

その顔には妖艶な笑みが浮かんでおり、レオンは目を離せなくなる。

次の瞬間、カノンがレオンに手を伸ばして自身に引き寄せてキスをした。

突然の事に慌ててレオンは逃げようとするもカノンは放さない。何度もちゅっちゅと唇が触れて、レオンは自分の体に力がいらなくなる。

そしてそのままぐらりと倒れこみ、レオンは意識を失う。

それを見届けたカノンはくすりと笑い、唇を舐める。

「ごちそうさま」

そういつにも増して色香を漂わせながら、カノンは倒れこんだのだった。

ちなみの事の顛末は、酒に全員が酔っていたため記憶に無い。

また、次の日、カノンが何故酒を飲ませた、酒は苦手って言ったのにー、とイオを責めたのは言うまでも無い。

シリアスは歩いてくる？ (2) (後書き)

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします。

本人だけが気づかない

翌日の事。

「嘘だ！ そんなの絶対に嘘だ！」

「嘘じゃない。カノンが自分からキスを迫ってきて、こう……」

「~~~~~」（言葉になら無い悲鳴）

先ほど目を覚ましたカノンは、二日酔いの頭痛を感じながら起き上がって、部屋の惨状を目の当たりにした。

倒れているイオ、トラン、レオン。そして樽に下半身を突っ込んで転がっている自分。

どうしてこうなった。

「ええっと、確か戻ってきたら、イオとトランが酒を半分ほど消費していて、それで作ってたといっていたんだよね」

そうカノンはちらりとキノコの山を見る。減った気配が全然無い。後で素材だけでも売るかと思息をつく。

そもそも前からお酒は弱いのだとカノンは皆に言っていたはずなのに。普段イオはいい奴なのに、何故こうも酒癖が悪いんだろう。

そこで、レオンが目を覚ましたらしかった。

そういえば、どうしてレオンが倒れているんだ？。

理由はすぐに分かった。

「ない、ないから。そんな事……」

酔った勢いとはいえ自分からキスするなど……何故覚えていなかった自分、とカノンは思って、覚えていたならどうなのだと疑問に思う。自分の気持ちが悪く分らない。

いや、それよりもレオンはどう思っているのだろう。まさかキスなんて。

別に何かの答えを期待しているわけではない。……多分。なので、試しに聞いてみると、

「カノンの柔らかくて温かい唇がこう、俺の唇に……」

「やーめーろー」

あまりのも生々しく聞こえて、カノンはがくがくとレオンの襟元を握り締めて揺らすも、レオンは笑ったままだ。

「いや、でもまさかカノンに襲われるなんて思わなかった」

「事故だ、不幸な事故だったんだ」

「だよな、俺もカノンは大切な“幼馴染”だからそういう対象に見れないし」

その言葉に、カノンは何故か大きな衝撃を受けた。

いや、確かに“幼馴染”だし仲間だから仕方ないというか、当たり前だが……。

まるで自分が何かを期待しているみたいではないか。

そう考えた途端、カノンは、はうと思った。

無い、これは無い。無い、絶対無いから。無い……でも本当に？。

そこでレオンがやけに上機嫌に、

「そういえば俺のファーストキスはカノンなんだよな」

「なん……だと？」

「昔やっただろ？ そうか……覚えていないか」

ちなみに魔王であるカノンのファーストキスは、百歳以上年の離れた子供に奪われずみである。いや、確かにあの時子供に化けてはいたのだが……。

お嫁さんになってよとその後言われて、あの時は慌てて逃げ出した。

何分子供の言う事。そんなに大げさに受け止める必要はなかったのに。

そういえばあの子供も、金髪に空色の瞳をしていたとカノンは思い出す。

すごい偶然だ。

「いや、まさかカノンがそんな風に思っているなんて気付かなかったよ！ カモーン、ベイベ」

「……実家に帰らせていただきます」

「あ、嘘です。冗談です……」

引き止めるレオンに、僕も冗談ですよと笑いかける。
まだ目的も果たしていないのに、帰るわけないのだから。

ギルドから依頼を受けた内容をカノンは説明した。

「よし、装備を整えに行こう！」

何故かテンションを高めるレオンに、カノンはジト目でレオンを見た。

「……どうやって？」

「さて、あのキノコでも売るか」

そうやって幾らかお金を得たものの、それも回復の魔法薬代で消えた。

そして、四天王の魔族に攫われるという場所に来たわけだが。

「『美男求む！ 人、魔族は問いません。ここから20km』えつと時給は、30リン……これ、魔物倒すより儲かる？」

「やはりここで普通に働いたほうが生活が……」

「カノンちゃん、カノンちゃん。レオンが本気で働こうか迷っているから止めて」

「うう……この時給……」

「ああ、カノンちゃんまでが大変な事に。トラン！」

「いいんじゃないか？」

「く、魔物嫌いのトランまで……金か、やっぱり世の中金なのか！ たしかにこれだけあれば、自分も含めて四人でこれでこうで、しかも宿代がかからなくて……て、違う。そうじゃない！」

「レオン、君は勇者として構えていればいい」

危なくカノンは本来の目的を忘れる所だった。

その言葉に、レオンがカノンに抱きついた。

「本当にカノンみたいな“幼馴染”がいて良かった」

「レオン……」

そんなレオンを見て、カノンは罪悪感のようなものを抱く。

利用しているだけなのに、レオンがこんなに嬉しそうだから困るのだ。

本当に困る。

そこで、馬のような魔物に引かれた馬車がやってくる。それはレオン達の前に止まった。

「……勇者御一行ですか？」

その馬を操る人型の魔物が無表情に問いかけた。魔物特有の角張った耳に、金色の瞳が揺れている。

「そうだと言ったらどうする？」

「そういった挑戦する方々も、運ぶように仰せつかっております」
その言葉にレオン達は顔を見合わせたのだった。

本人だけが気づかない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

今日は何回更新できるか不明ですが、よろしくお願いします。

居心地の良い場所を離れよ

石造りの聳え立つ城。窓からは人影……否、魔族だろう、が見え隠れする。

「それでは私はこれで」

そう馬車で送ってくれた魔族は一礼して去っていく。

罠かもしれないと警戒していたレオン達だが、そんな事はなくここまで連れて来られた。

そして、現在大きな城門の前に立ち止まっている。理由は、

「さっきから何度も押しているんだが、一向に開かないんだよな」

全員で扉を押していたのだが、一向に開く気配が無い。

困ってちょっと下がって扉を見てみると、扉がゆっくりと開き始めた。

そこには執事服を着た魔族が困った顔でこちらを見ている。

「この扉は、外側に開くように設定されていますので、押されても開かないのです」

「すみません」

何故か謝ってしまうレオン達。そして中を案内されるも、人らしい給仕もちょうくちよく見かける。

全員、美形の男だが。

それは良いとして、どういうわけか一室に通される。

「ただいまご主人様は忙しいので明日までこの部屋でおくつろぎください」

「……えっと、俺らは勇者で……」

「存じています。他に何かございましたら、備え付けのベルを鳴らしてください」

そういつて去っていく案内人の魔族。

高級な感じの宿というか何というか。カノンは首をかしげる。

それにダブルベッドが二つしか無いとか、何かがおかしい気がする

る。

加えて、ここで待っていてくれと部屋に案内される事自体がおかしい。そもそも自分達は勇者で敵なのに？。

「どうしようか……そうか、家捜しを！」

と、レオンが言った瞬間再び先ほどの案内人が顔を出し、

「もし、調度品を壊すようなことがありましたら、それ相応の代金を払っていただくか、体で償って頂きますので、ご了承ください」
事務的に告げる魔族。それに、レオンが反応した。

「あ、はい、分かりました。所で、体で償って貰うというのは？」

「東の城壁が最近崩れかけていますのでそちらの補修です、それが何か？」

「ですよー」

そのまま去っていく魔族の案内人。とりあえずカノンは一発レオンを殴っておくかどうか悩む。

どうしていつもいつも、そういう発想に結びつけるのだろう……はあ。

「と、いう事はだ。これから魔族の兄ちゃん姉ちゃんをナンパに行ってもいいってことか？」

「……下手すると、物理的な意味で喰われるよ？」

頭が痛くなりながらもカノンはそう忠告する。

もっとも、高位の魔族……特に知能の発達した魔族は確かに人間を喰う事が出来るが、基本的に性交渉で魔力を食らうことが多い。その方が、捕まえる手間が省けるからだ。

ようするに、キスしまくりというけしからん話なんだよな、とカノンは心の中で呟く。

もっとも満月の夜といった魔物の衝動が強く出た時はその限りではないが。

一応魔族同士でも魔力を喰らう事はできるのだが、闇と光という相反する者同士、お互い求め合う傾向が強かったりする。

さて、それは良いとして。

「大丈夫だって。知能のある奴は、見境なく襲ってこないし、というわけで俺は行く!」

く、余計な知識だけ増やしやがって、とカノンは心の中で毒づく。そして意気揚々と駆け出したレオンに向って、カノンは杖を振り上げて、電撃の魔法を使おうとして、外れたら弁償という言葉が浮かび慌てて魔法を使うのをやめる。

その僅かな時間差で完全に後れを取り、カノンはレオンを見失ってしまう。

「……良いだろう、この僕を甘く見たことを後悔させてやる! イオ、トランは留守番よろしく!」

任せて!、とイオが答えるのを尻目にカノンは走り始めたのだった。

レオンだって実は考えていたりする。

「さてと、この城の内部構造をある程度知っておいて、いざという時の脱出経路を決めておかないと」

そもそもこの依頼、何かがおかしいのだ。何か別の目的がある気がする。

それに、この前会ったあいつもカノンの事を欲しいって言うた。

確かにカノンは可愛くて綺麗で魅力的だが、それだけで選ぶような奴ではなかった……はず。

いや、でもカノン、本当に可愛いし。それもありえる、か?。

だが、計算高いあいつの事だ。それだけのはずが無い。わざと負けたのも何かの布石か?。

魔法の明かりが灯るであろう窪みは、目印になりそうに無い。窓も同様。

本当に構造がとても単純で分かりやすい。もっと入り組んでいるものだと思ったが、そんな事はない。

そして途中から部屋を覗くのを止める。

先ほどから同じような客間にばかり。階を下がると厨房があり、そこにいた魔族とおじさんがに汚れたままここに入ってくるなどレオンは怒られた。

大体分かったの、上の階を目指す事にする。

そういえば偉い奴って上のほうに住んでるよねと思うも、そこからは人間にも会う。それはそれは美形の。

とりあえず、ナンパしているふりをしつつ、そこら中を駆けて、人や魔族の気配がなくなる。

この場所に違和感をレオンが感じていると、通路の一角に一人の魔族が待ち構えていた。

黒髪に金色の瞳。

年若く見える魔族だが、そもそも人間と魔族の年齢を一緒に考えてはいけない。

幼い姿でも、ジジイだったりババアだったりするのだから。

見た目の感じから、レオンと同じ年のように見えるが。

彼はにこやかに友好的な笑みを浮かべてレオンに言った。

「一発殴っていいかな？」

居心地の良い場所を離れよ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

別の話も書きたいけれど、なんか、今すごい話が思い浮かぶ。

振り返れば奴がない

「お断りします！ 痛いのは嫌です！」

レオンは言うも、拳を握り締めて繰り出してくるその魔族を素手で受ける。両手を押さえて、ぎぎぎと力比べをする。

それを見て更にその魔族は苛立ったように、

「嫌だといって止める奴がいると思うか！ さっさと抵抗を止める！」

だからといって大人しくやられる奴はいない。加えて、相手はレオンだった。

「無理矢理はいけないと思います！」

「何の話だ！」

「卑猥な話です！」

「更に悪い！ 気持ち悪い事を抜かすな！」

としばらくぎゃあぎゃあ話して、二人はその状態のまま黙る。

その沈黙を破ったのはレオンが先だった。

「……何故俺が殴られなければならないのですか？ だって初対面ですよ？」

その問いかけに、ふんとその魔族は見下したように笑って、

「分からないのか？ 自分がどれほど酷い仕打ちを私にしているのかを！」

「えっと、初対面ですよね」

「初対面だ。だが、お前の事は話を聞いて知っている。情報収集は基本だからな」

「はあ、それで、どのような理由で？」

それに深々とその魔族はため息をついて、それから、

「……お前と私はキャラがかぶっているんだ」

「……………（・ω・）」

「そんな顔をするな！ こっちは死活問題なんだ！」

「いや……そうか、うん。でも別にそれほど迷惑かけて無いんじゃない……」

「一見そう見えるだろう？ でもだな、アピールポイントって大事なんだ」

レオンは、はっと思い当たる。

「まさか……お前もカノン……」

「呼び捨て……呼び捨てだと？ 死ぬ！」

怖ろしい程の魔力と殺気に、レオンは命の危険すら感じて、けれど戦おうと剣に手をかけるが、

「レオン！ こんな所に居た！」

そんなカノンの声に、レオンが来るなど叫ぼうとして、どうしてか魔族の殺気が瞬時に治まる。

よく見ると、目の前の魔族が顔を真っ赤にしてカノンを凝視している。

そしてカノンの目がその魔族を捕らえた途端、その魔族は脱兎のごとくカノンと反対方向に逃げ出した。

それを呆然と、見送ったカノンはポツリと呟く。

「僕はそんなに怖いのか？」

「いや、カノンがモテモテなだけだと思う」

「は？」

間の抜けた声をあげるカノンに、レオンは苦笑する。

本当にカノンは自分がどういう風に見られているのか分かっていないから困る。

その方が、レオンには都合が良いといえば良いのだが。

「……あいつか」

当のカノンはいえればじつと、先ほどの魔族の逃げていった方向を見ている。

それが何処となく深刻そうで、レオンはチャンスとばかりに駆け出そうとして、カノンに足を引っ掛けられた。

「レーオーン！。逃げられると、本つつ気で思ったの？」

「えっと、もしかして怒っていますでしょうか？」

「これから寝るまでお説教タイムだ。素敵な子守唄だろう？」

「いや——！」

誰もいない廊下に、レオンの悲鳴がこだましたのだった。

「うう、いやだ。お説教は……むにゃむにゃ」

しくしくと泣いたように寝言を呟くレオン。

ちよつと言い過ぎたかな、と起き上がってカノンはレオンを見るが、その無防備な寝顔に体の血が騒ぐ。

美味しそう。

「……いや、駄目だから。というか、昼間のあれ見ておいしそうとか無いから」

そう自分にカノンは言い聞かせる。

現在深夜二時を回った所。ダブルベットなので、カノンはレオンと寝ていた。

「うん、カノンちゃんはレオンとだね！」

イオと一緒に寝ようと言ったらそう言われてそうなってしまった。お互い右端と左端に眠っているから、別にどうということも無い。無いはずなのに、どきどきしてカノンは眠れない。

そんな折に、魔力を感じた。それを読み取って、カノンはレオン達に見せた事の無い冷たい表情になる。

「招待されたのだから、いくでしょう」

そう呟いて、レオン達を起こさないようにこっそりとベッドを抜け出す。

そんなカノンが部屋を出てすぐに、レオンがまぶたを開いた事など気づきもしなかったのだった。

欠けた月の青白い光が降り注ぐ庭園。

そこに昼間レオンとやり合っていた魔族が立っていた。

強い魔族らしい……何処か高貴で、自信に溢れる特別な者。その美しさに普通ならば見惚れてしまうだろう。だが、

「それで、僕をこんな所に呼び出してどういうつもりだ？」

「少しお話をさせて頂きたかっただけです。魔王様」

その言葉に、カノンの目がすつと細くなる。

「……武器や魔族の兵の準備等をしているかみたが……」

「ありましたか？」

「非常に上手く偽装されていた」

「ばれてしまいましたか。さすがは魔王様、といった所でしうか」
あっさりと認めてしまうその魔族に、カノンは冷たく告げる。

「逆らうつもりか？ この僕に」

その問いかけに、怯える所かむしろその魔族は笑みを深くして、

「……本当は興味が無かったのです。僕はまだ名前を襲名していませんが、父が貴方の父君に懸想をしていた事もあり、準備をしていたのですが……気が変わりました」

「それで、逆らうつもりか？」

「……貴方を追い落とすつもりはありません」

「信用しろと？」

「逆らうつもりならば、とつくの昔に貴方の大切な勇者達と共に葬つていますよ？」

そう、何処かおかしそうに残酷な事を口にする魔族。

確かに言われたとおりだが、レオン達が殺されると聞いてカノンの中から殺気が湧き出てくる。

そこで彼は、笑うのを止めて真剣な表情になった。

「そんなに勇者達といった人……光がいいですか？。同胞の闇ではなく？」

「何の話だ？」

意味が分からないと思い、聞き返す魔王を彼はじっと見て、ふうつとため息を付いた。

「分かりました。僕にもまだ、可能性は残されているという事です

ね。所で魔王様、僕はまだ名前を襲名していないので、リンツとお
よび下さい」

「……リンツ、か。分かった、覚えておこう」

「それでは、今日ですね、勇者達と茶番をいたす事にしましょう」

「……そういえば昼間、やけにレオンに突っかかっていたがどうい
うことだ？」

「似たもの同士なので衝突した、それだけです」

「そういうものなのか？」

「そういうものです。それでは失礼させていただきます、魔王様」
と、去ろうとするリンツ。けれどすれ違いざまに魔王の頬にキス
をする。

「な？」

「本当に可愛らしいですね、魔王様」

何処か楽しそうに笑いながらリンツは去っていく。

カノンは、リンツの触れた頬に手を当てる。

まだ感触が残っている。何なのだこれとは、人よりも長い時を生
きたカノンは思ったのだった。

「あれ、君、いたの？」

知っていたくせにとレオンは舌打ちする。そして牽制も忘れない。

「カノンに手を出すな」

「まだ君のものでは無いでしょう？」

冷たい火花が散って、けれどレオンのほうが先にきびすを返す。

カノンが戻る前にベッドにいなければならない。と、

「君もほどほどにした方がいいよ？」

そう忠告されてレオンはふりかえると、そこにはもう誰もいなか
った。

それを見て、もっと強くならなければとレオンは心の中で思った
のだった。

振り返れば奴がない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

あと一回更新できるか？

考えるな、感じるんだ

「主人がお待ちです」

二回ノックされてから、案内人の魔族が顔を出した。

因みに、現在、ステーキ肉（カノンの分。カノンは果物しか食べないことになっている）の争奪戦が三人の間で行われていた。

「肉、肉を寄越せ———！」

「ふ、いくら我らが勇者様レオンといえど、肉は渡さない！」

「肉、肉、肉、肉」

飛び交う矢に短剣に剣撃＋魔法。

とりあえずカノンは結界を張ってその中から三人が出られないようにする。

正確には壊したり汚したりしないようにしたわけだが。

「なんでこんなに醜い争いを……」

カノンはそう呟かずにはいられない。

食事というものは、あれほど仲の良かった仲間をかくも……いや、世の中弱肉強食だし仕方がない、のか？。

そして案内人も案内人である。

その惨状を見ても顔色ひとつ変えない。よく訓練されている。

「ご主人がお待ちです」

再度、案内人が告げると、三人が争うのをようやく止めた。それを見計らって疲れたようにカノンは三人に告げた。

「……三等分して三人で分ければ良いのでは？」

その言葉に、三人は顔を見合わせたのだった。

「はっはっはっは、よく来たな汚れた勇者よ！」

色々な所から角のようなものが生えたお面をかぶった変な生き物が一人大きな部屋で待っていた。

レオンは声から昨日会った魔族と推察する。が、

「……なんで俺が汚れているんだ？ カノン」

「何で僕を見るんだ。僕が知るわけ無いだろう？」

小声で言ったのに、何故か彼まで届いたようで、

「あ、カノン様の事をまた呼び捨てにした？！」

「「「「……………（レオン一行）」」」」

「ああ、沈黙が痛い。ぴりぴりしちゃう！」

こそこそとレオン達は輪になって話す。

「あいつ、なんだろう……レオンと同じ臭いがする」

イオが、とてもとても深刻そうに顔を真っ青にして告げた。それにレオンは顔をしかめて、

「失礼な！ 俺はあんな変な奴じゃない。なんだその目は！ そんな目で俺を見るなー！」

うわーんと嘔泣きするレオンをカノンとイオとトランは無視して、無いわーと三人で呟いた。と、

「聞こえているぞそこ！ 誰が変な奴だ！ 私は強いんだぞー！」
大丈夫じゃない答えを叫ぶその魔族に、全員でふうっとため息を付いてから、レオンが一応主役なのでその魔族に言った。

「取り合えずその不細工、俺が勇者レオンだ。連れて行った美形を返してもらう！」

「不細工！、今不細工って言ったか！」

そこで被り物を、頭から抜いた。中から出てきたのはやはり昨日の魔族。

彼は自分を指差して、

「これが私のハンサム顔だ！ 不細工など断じて無い」

漆黒の黒髪に金色の瞳。確かに美形である。きらりと光り輝く白い歯がうざい。

だが、それ以外にも張り合う変な奴がもう一人。

「ふ、この俺のイケメンな俺に勝てるかな！」

きらりとレオンも歯を光らせる。

それを見てカノンは頭痛がした。そしてすぐ傍に先ほど案内して

くれた魔族が残っている事に気づく。

試しに聞いてみた。

「……どうしてあんなになるまで放っておいたんですか？」

「いちいち考えますと、疲れますよ」

顔色一つ変えない。よく出来た魔族だとカノンは思った。

そして、似たもの同士の戦いは更にヒートアップする。

「自分でイケメンとっていて恥ずかしくないのか、この変態勇者が！」

「自分こそハンサムとか自分の事を言って、恥ずかしくないのか！
この変態魔族」

「黙れ、バーカ」

「馬鹿って言った奴が馬鹿なんだからな！」

口喧嘩のレベルが子供の喧嘩レベルになっていく。

どうするんだよこれとカノンは思った。そこで、

「そもそも人間の美形ばかり攫ってどう使用って言うんだ！ 喰うのか！」

「下品なやつめ！ 美しいものはただ愛で、鑑賞するものだ！ 触れるものでは断じて無い！」

「はん、本当か？ だったら今すぐそいつ等と呼んで来い！」

「良いだろう、君達、来るんだ！」

ぱちんと指を鳴らすと、転送されてくる銀髪美少年が沢山。

「ふふふ、私の美しさを引き立てるのに彼らは素晴らしいと思わないか？ 穢れた勇者よ」

「きゃー、リンツ様素敵！」

一斉に褒め称える少年達。

いい加減カノンは頭が痛くなってきた。こんなのが魔王の次に強い魔族？。これが？。

もう泣いていいかな、これ。

そこで珍しくきりっとした顔でレオンが問いかける。

「何故、銀髪美少年ばかりなんだ？」

「決まっている、カノン様が銀髪だからだ！」

嫌な沈黙が支配した。視線がカノンに集中する。

その視線がリンツを讃える少年達からの嫉妬の視線が多数混ざっている事にカノンは気付く。なので、

「……気持ちが悪い。戦略的撤退をします」

くるっとその場から立ち去ろうとするカノンに、焦ったようなリンツが、

「ま、待ってください、カノン様ーっ。というか良いのですか？

任務遂行できませんでしたという事で」

「……分かった。もう少し話を聞こう」

生きていくって本当に大変だとカノンは思った。そこで、

「ふ、男としての魅力で引き止めたと……ああ、すみません調子に乘りました、許してください」

仕方が無いので、カノンは静観する事にした。

そして、再びリンツはレオンへと向き直り、上半身の衣服を脱ぎはじめた。

脱いだその上半身は、意外に筋肉質で着やせするタイプであるらしい。

そして腕を曲げて、力瘤を作ってみせる。

「ふふふ、勇者よ、お前のような優男に、このようなものは出来まい。私も日々トレーニングを重ねてようやくこうなったのだから！」
魔族なんだから体鍛えるより魔法の研究しろよとカノンは思った。
そもそもどんなに体を鍛えようと、魔法で一発だろう……剣使うわけじゃないんだから。今だって装備していないじゃないか。

しかし、それに呼応するかのようにレオンが不敵に笑い、

「ふ、その程度で筋肉自慢とは！ 恥かしくないのか！」

「貴様！ わが筋肉を愚弄する気か！」

「そんなの筋肉じゃない！ 贅肉だ！」

「く……言わせておけば……良いだろう、そこまで言うのならお前の筋肉の力、試してやる！」

いつから筋肉の戦いになった。カノンはいい加減頭痛を覚えるどころか、何も感じなくなっていた。

「勝負は腕相撲。三回勝負だ！」

「そうすればそこにいる少年達を返してもらえるな！」

そこで少年達がブーイングする。

「ええー、このほうがいい生活できるのに！」

「それに周りは美形達ばかりだし、リンツ様素敵だし、きゃっ」

「それに給料が良いんですよー！」

とかなんとか。気持ちは分かる。気持ちは。

でもカノンは理性で考えるとそれは駄目なんじゃないかと思う。

そこで、

「……一回帰ってからまた来れば良いんじゃないか？」

レオンが珍しくもつともなことを言う。が、

「えー、めんどくさーい」

何だろう、イラッとする。そもそもなんでこちらが悪者のようになっているんだ。その腐った性根を叩きのめしてやりたい……これは年長者の務めだよな、近頃の若い者は本当に……。

「カノンちゃん、怖いからもつと穏やかに笑って、ね？」

「イオ、僕はそんなに怖い顔をしている？」

「美人が台無しだから、止めた方がいいよ。ね☆」

カノンは笑みを消して無表情になった。実はそれも結構怖かったが、イオは黙っていた。

さっきの笑みよりはましだ。

「だが、そちらが負けたらカノン様を貰う！」

「カノンは商品じゃない！」

「ふん、カノン様を商品にしないなら、私は勝負しないもんねー」
そうそっぽを向くリンツ。仕方が無いので、レオンの傍に行ってカノンは袖を引っ張った。

「レオン、僕を景品にして」

「でも……いいのか？」

「勝算は？」

そこで清々しい笑みをレオンは浮かべた。

「100%だ！」

「健闘を祈る！」

パシンと手をカノンとレオンは打つ。

その様子が気に入らないのか、リンツがその姿に似合わず、けつと呟いたのだった。

考えるな、感じるんだ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

後一話で一区切り……今日の更新は、無理、か？。

筋肉の力は偉大

「y o s i、今こそ新技を試す時!」

そう叫んだかと思うと、レオンの上半身の衣類が弾け飛んだ。

中から現れたのは、筋肉隆々となったレオン。上半身だけ異様に発達したレオンだ。

ちなみに顔だけは元のままなので違和感しか感じない。

だがそのあまりにも衝撃的な光景に、カノンも含めて誰もが言葉を失った。

「じゃあ行って来るから☆」

カノンに笑いかけて歩いていくレオンをカノンは引き止めた。

「カノン?」

「『カノン?』じゃない! それ、そんな技……まさか、この前レベルアップした時に……」

「そうだ! やっぱ男は筋肉だよな!」

そんな楽しそうなレオンを見て、カノンは泣きたくなった。でも泣いてもどうにもならないので一先ず、

「その技、返品して来い」

「え、でも……」

「一週間以内で戦闘に未使用であれば返品できたはず」

何で人間というか敵の技の管理まで、魔王であるカノンがしないといけないのだ。というかそんな知識が必要になるなんて……。ため息ばかりがカノンの口から零れる。

が、レオンは首を横に振って。

「え、嫌だよ。俺この技気に入っているのに」

「レオンは弱いんだから、少しでも良い技を持って、選択肢の幅を……」

「凄く素敵だと思わないか、この筋肉!」

きらきらと目を輝かせるレオン。可愛いよ、確かにそんなレオンは可愛いとカノンは思う。けれど、

「……分かった」

「だろ、この筋肉……」

そこで、カノンはレオンを杖で殴った。

「ぐふっ」

そしてそれと同時にみるみる筋肉が消えていく。後には、レオンがいつもの体型で気絶して倒れる。

カノンが使った業は、いち、にの、ポカーンで技を忘れさせる魔法だ。

これで再度新しい技が契約できるはず。

「まったくレオンは、悪ふざけが過ぎる……」

そうカノンは嘆息して、今はレオンをこのままにしても大丈夫だな、次はと、カノンはリンツに向き直った。

その表情は、先ほどのまでの困ったような穏やかな表情ではない。それを見て、リンツを取り囲む少年達は言葉を失う。

それに対してリンツは、へえ、と面白そうに笑った。

「もしかしたなら、カノン様がお相手してくださるのですか？」

「ええ、僕が相手になりましょう」

そこで、襟首を掴まれて、カノンはずるずると壁際まで引きずられた。この感じはイオだなとカノンは気付く。

そして、イオが怒ったようにカノンを見る。

「どうするの、カノンちゃん。レオンだって、確かにふざけてあの業を選んだと思うけど、今必要な業でしょう！」

「……必要ないよ。だって僕が勝つから」

そう言い切るカノンに、イオは何ともいえない顔をする。

そして、搾り出すように口を開いた、

「……もう少し僕達を信用してよ。力になりたいんだ。レオンは僕達よりもずっと信じて欲しいはずだよ？」

「……………」

まさかそんな事を言われるとは思わなかったので、カノンは本当に驚いた。そしてそれをそのまま顔に出した。

それを見て、更にイオが何か思うところがあるようにしかめる。だからカノンは精一杯の笑みを浮かべてイオに答えた。

「……ごめん。でも、ありがとう!」

それは本心からだった。本当に心配されていることが分かって、それは悪い気はしない。だから、精一杯自分にできることを彼らのためにしようとカノンは決めた。

一方イオは、その笑顔を見て反則だと思った。これでは怒れない。

「じゃあ、僕、がんばるから」

そう小走りで、いつの間にか要された机にカノンは座る。目の前にはリンツがいる。

「上着は脱がなくていいのか?」

「ええ、かまいません」

そう答えつつ、合図があって一回戦が始まる。

そこで少年達がリンツに声援を送る。

「「がんばってリンツ様!」」

それにイオが対抗心を燃やす。

「よし、僕達も応援だ! 僕は踊る!」

「では俺は、笛を吹こう!」

ぴーひーと笛の音に合わせて、イオが踊る。それは確かに見るものを惹きつける踊りではあったのだが、

「てい」

その油断をカノンは利用した。

第一回戦は、カノンの勝ちである。リンツはぶすつと頬をふくらませて、

「その人間、踊るな!」

「別にそちらも声援を送っているのでは?」

面白い冗談ですねとにっこりとカノンは笑うと、リンツが、
「じゃあ、お前達静かにしろ。これでそっちも止めろ」

気分を害したような少年達。それを見て、カノンはほんの少し溜飲が下がると同時に、皮肉を言いたくなる。

「残念ですね、イオの踊りは凄く魅力的なのですが」

「目障りだ」

きっぱりと言い切ったリンツ。そこで再び腕を組みなおす。

二回戦の合図がある。沈黙の中、拮抗する力、そこで、

「痛い！」

カノンが悲鳴を上げた。するとリンツが焦ったように力を抜く。

だが、それがカノンの狙いだった。

「てい」

またしてもカノンの勝ち。よって勇者達の勝利である。

「僕達の勝ちです」

えー、と少年達が言っているが、カノンは聞こえないふりをした。

カノンは、目の前のリンツに視線を戻す。その結末に、リンツは納得がいけないらしい。

そのすねた様な表情がレオンに似ていて、カノンはほんの少し笑ってしまう。

そこでリンツが席を立て、カノンのすぐ傍までやってくる。

そしてカノンの顎を掴むと、自分の唇に重ねた。

「んっ……んんっ」

ちりりと唇を通して妙な感触を感じたが、カノンはそれどころではない。

と、襟首を掴まれて倒れこむように後ろに引きずられて、そのまま抱きかかえられる。

見上げるとレオンが居た。

ただ、いつもと違って頼りない表情ではなくて、何というか……。

「……カノンに手を出さないでください」

「警告はしたよ？ 君に何が出来るんだい？」

「貴方には関係ありません」

そのまま、今度はカノンを抱き上げると、レオンはきびすを返す。

リンツも何も言わない。

レオンの様子がいつもと違うから、抱きかかえられたままカノンはレオンに恐る恐る声をかける。

「あ、あの、レオン？」

「ああ、そういえばカノンが勝ったので、俺に君達もついてきてくれ。イオ、トラン、帰るぞ」

さっさとこの城から出たいというかのように、そしてレオンはカノンと話すつもりはないらしい。

それが頭にきて、カノンは下ろせというも、まったく聞く耳を持たない。

結局、宿に戻るまでカノンはレオンに口を聞いてもらえなかった。

その広い広間に残っていたのはリンツ一人。

「さて、と。負けてしまったが……手は打った」

そう連絡を入れると、相手の三人は笑う。実際に会うとどうだった、ときかれてリンツは答える。

「綺麗で、魅力的で、本当に今すぐ自分のものにしてしまいたかった」

そう答えると、彼らはそれは楽しみだと答える。

そして幾つか話してそして、会話を切る。

「カノンカース様、か」

リンツはその名を口の中でそっと転がして、美味しそうに飲み込んだのだった。

筋肉の力は偉大（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

一区切り付きました。次回更新は未定ですが、よろしく願います。

困る質問No, 1

宿に着いて、

「キス、何で黙ってされていたんだ？」

「いや、突然の事で……もしかして、レオン、それで怒って？」

「……大切な”幼馴染”だからな」

本当はそれだけではない事をカノン以外は全員知っていたので、彼らから見ると修羅場のような状態である。

だが、当のカノンは嬉しそうだった。

「そっか、心配してくれたんだ」

「……そうだ。まったく、キスなんかされて……」

カノンの雰囲気からどう考えてもレオンの怒っている意味を勘違いしているらしい。それはそれで好感度upかとイオが分析していると、

「そうだよね、百回キスすると子供が出来るしね！」

レオンが固まって、それを聞いていたイオが噴出した。しかもそれだけでは笑いが収まらないらしくお腹を押さえて床に転がった。

「イオ……失礼だよ。僕はそんなにおかしい事を言っただけ……
…レオン？」

真剣な表情でレオンはカノン両肩に手を置いて聞いた。

「カノン、いま自分が何を言っただか分かっているのか？」

「え？ だから、百回キスすると子供が出来るって」

それに今度はふいっと、レオンはイオ達の方に歩いていき、

「どうしよう……」

「いや、僕に言われてもね……」

「試しに子供がどうやって生まれてくるか聞いてみたらどうだ？」

「トラン、いいアイデアだ」

そこで不思議そうにこちらを見ているカノンに、レオンは聞いてみる。

「カノン、子供がどうやって生まれてくるか知っているか？」

「確か人間の子供はキャベツ畑で、魔族はコウノトリが運んでくるんだっただか……逆だったかな？」

「よし、わかった。そのままでもいい」

へんなのと首を傾げるカノンをよそに、レオン達は作戦会議をする。

「どうするんだ、あれ。というか、うーん」

「いっそレオンが教えてあげたら。手取り足取り、ね？」

「……そうだ、とりあえず俺が百回カノンにキスして子供が出来ないって事を示せばいいんだ」

そんなレオンの発言に、イオがにまにまと笑い煽る。

「レオン、良いから襲っちゃいなYO☆」

「無理だ。カノンはまだ俺の事……」 幼馴染” としか思っていないから」

カノンの事を大事に思っていますと暗に言うレオンに、イオは更に楽しそうに笑って、

「あら、純愛なんだ」

「落とす過程が楽しんだよ。それに、それをやってから、その後で子供が見たらいけない本を買いに行かないと」

「自分で教えてあげないの？ カノンちゃんに、こうとか、こうとか」

「……俺が知らない内に、『教えてあげるから来ない？』『分かった』『アッー！』てなったらどうするんだ！」

「……あのカノンちゃんをどうこう出来る人がいると？」

「はっきり言おう、エロ用語で顔を赤らめるカノンが見たい！」

「よし、行け」

「ありがとう、わが友よ」

がっしりと手を握り合い、頷く二人。その二人を良い友情だなど、トランが表情を変えることなく頷いていた。

「え？……キスするの……だって……」

あまりにカノンが顔を真っ赤にしてしまうから、レオンまで頬が熱くなる。それに顔を赤らめるカノンが可愛いから仕方ないとレオンは思う。

「その、レオンは僕と……」

「ち、違う。カノンは”幼馴染”だからそれ以上の感情は無い」
「だったらどうして」

「……”幼馴染”だから、間違っている事を教えておかないと」
「そんな！ 父様が嘘をついたって言うのか！」

カノンが何故そんな事を行っていたのかレオンは気付く。そして、成長過程で何処かでそういう話を聞くはずなんだけれどなど苦笑して、

「ほら、子供の時ってそういう話はわざと避けるようにするんだ。きつとカノンの事が可愛いから、わざと嘘をついたんだ……」

「そう、そうか……」

しよぼんとするカノンの隣にレオンは座り、カノンの顎を右手持ち上げる。

そのままレオンはカノンに唇を重ねた。カノンはレオンの唇が柔らかくて温かくて、”甘い”と思った。

そして思った瞬間、何を考えているんだと慌てて飛びずさる。口がぱくぱくするだけで、カノンは声が出ない。

「~~~~~」

「何だ、この前の夜は積極的にやってきたのに」

「だって記憶にないし。それにキスしても子供が出来たら……」

「責任とってやる。だから、やってみよう、百回のキス」

前にも増して顔を赤くするカノン。実の所、責任とってやるとか、レオンの顔がこういう顔していればカッコイイと思ってたとか、本当に心臓に悪い。

そしてカノンも、してみても良いと思う自分と、レオンが嘘つくはずないからきつとそんな事はないのだろうという、何処か残念な

気持ちで頭がいっぱいで、気が付くとレオンに再びキスされていた。今度はカノンは逃げなかった。

なのでレオンは軽く唇をすってから離す。

だが、そんなレオンの目に映ったカノンは何故か不敵な笑みを浮かべていた。

「下手だな」

衝撃的なことを言われて、レオンがえっ、となっている隙にカノンがキスしてくる。

軽く触れて吸うだけだが、上手い。

「どうだ？ これくらいでないと」

「カノン、一体今のキスは誰から教わったんだ！」

「え？」

「誰だ、一体誰に……」

レオンが慌てたように聞いてくる。よく見ると怒ってもいるようだ。だから、おかしなレオンとカノンは笑って、

「誰もいないよ？ それはレオンも知っているでしょう？」

確かカノンがそういう経験がある設定で記憶操作はしていなかったはず。案の定、レオンが黙る。

「……悪かった。続きするな」

納得がいていないようだが、執拗にレオンからしてくる。

本当にレオンは”幼馴染”が大事なんだなと思い、カノンは胸がちくりと痛んだ。

それが何だか癪で、カノンもキスで反撃を開始する。

しばらくそれを繰り返して、百回になる。

「な？ 何も起こらないだろう？」

「そうだな。僕が間違った知識を……え？」

そこでカノンは窓の外を見て、声を上げた。

何かが近づいてくる。

それは大きな鳥で、何かを抱えているらしかった。

それが真っ直ぐにこちらに向ってきて、そして窓から飛び込む。

大きな鳥だった。それはいいとしてその鳥が持っているものの方が重要だった。

籠の中白い布に包まれてそれは泣いていた。

「赤ん坊？」

誰とも無しにカノンが呟く。

それは、人間の赤ん坊だった。

困る質問No. 1 (後書き)

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

web拍手に、自作絵を入れておきました。カノン君です。下手な絵で、女の子に見えるかもしれないのですが、それでもokという方は見てやってください。

また、ムーンライトノベルの方の同名小説のweb拍手は、番外編となっています。18歳以上の方はそちらもどうぞ。今のところ投稿内容は同じです。かりうむいおん、で検索すると出てきます。I Dは一般向けと分けているので、そこからのリンクではいけません。すみません。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

機会の逃げ足は速い

おぎゃー、おぎゃーと泣く赤ん坊。そしてなんか大きい鳥。

「えっと、レオン？」

次の瞬間、カノンはレオンに押し倒された。

呆然と見上げるカノンに、レオンは真剣な表情で、

「……責任持つから、最後までやらせてくれ」

そのままレオンはカノンに覆いかぶさろうとして、ドアが勢いよく開いた。

恰幅の良い女性が入ってきて赤ちゃんを抱き上げる。

「私の赤ちゃん！」

何が何だか分からない。

その女性の話によると、その大きな鳥は”コモチコウノトリ”と
いって、赤ん坊と一緒に育てると、赤ん坊が攫われた時取り戻して
くれるらしい。

「ただこの子方向音痴だね。本当にご迷惑をおかけしました」

そう言って、赤ん坊は彼女に連れて行かれたわけだが。

「……焦った。俺、本当に……」

「僕もだよ……」

未だに衝撃が抜けきらないらしく、ぼんやりとしているレオンと
カノン。それを見ていたイオがカノンの隣に座って面白そうに問い
かける。

「どう、カノンちゃん、レオンとなるって思ったら……」

カノンは顔を赤くしてふるふると首を振った。

「無い、無いから。そんなの……レオンの事は”幼馴染”で仲間だ
としか思っていないから！」

「うむ、仲間という好感度アップと……こんな面白い事メモしてお
かなくちゃ」

そう、青色の手帳を取り出して書き記すイオに、カノンはさっとその手帳を取り上げようとして失敗し、床に顔面からぶつかりそうになり寸での所でレオンに引っ張られた。

「大丈夫か？ 少し休もう」

「うん、大丈夫だよ……それよりレオン、一つ聞いていい？」

「何だ？」

そこでカノンが本当ににっこりと自愛に満ちた表情で、

「最後までってどういう意味？」

「……………」

「……何か言え」

レオンは黙ったまま、ふっと笑った。

「……合体するんだ」

「合体？」

合体ってアレだよな、魔物とかを融合させて別の魔物にしたりとかの、後は金属と融合させたりとか？。

「そう、手に様々な文様を描き出す事により、魔法を使うための呪文を短縮でき、時に目からビームを……」

「レオン、本当は違う意味だろ？」

レオンの瞳を覗き込んで、カノンは囁く。

それが予想外でレオンは目をぱちぱち瞬かせる。

「……どうしてそう思った？」

「ずっと見ていたから、レオンがどんな時に嘘をつくのか分かるんだ」

意外に、カノンはレオンの挙動を見ていたらしい。でも、そういった事が分かるのは、ずっと目で追いかけないと気付かない。

そして、逆にそう言うという事は、カノンはいつもレオンの事を見ていますよという事で、とりあえず外野から見ていたイオは面白い事になってきたと状況を見守る。

「そうだな、だったら最後にまでの意味、カノンに教えてやるよ。

……実技を通して」

レオンの真剣な表情。イオは邪魔したら悪いかなと、空気呼んで席をはずそうとする。

そしてレオンがカノンの手を引っ張り引き寄せようとした途端、再びドアが開かれた。

「すみません！ 先ほどは失礼しました。これはほんのお礼で……」
先ほど恰幅の良いおばさんが入ってきて、何処か不思議そうにレオン達を見たのだった。

機会を失うとそれ以上何も出来なかったり。

そして、そういった本を買う気も失せたレオンは、カノンに付き添いで依頼料を貰いにいった。

「これが、今回の成功報酬です」

「ありがとうございます！ これでしばらく食い繋げる……」

後光が差すんじゃないかという位嬉しそうに笑うカノンに、レオンは何故かがんばらなきゃいけない気がした。

そこで、白い服を着た僧侶らしい少年がレオンに向かって走ってくる。

「レオン様！」

彼はそのままレオンに抱きついた。けれど、レオンは慌ててその少年を引き剥がして、カノンの方を見る。

案の定、先ほどと同じにこやかだが背負っている何かが違う。

すぐさま、オラオラされてしまいそうなそんな怖い雰囲気。まずい、これは危険だ。

「……レオン、彼は？」

「いや、知らない。少なくとも俺が声をかけた人間なら、覚えているはずなんだが……」

「酷いですレオン様！ 昨日会ったじゃないですか」

「昨日……」

確か、ホーリィロウと戦ったはずだが……レオンは首をかしげる。記憶に無い。と、

「ああ、あの時居た僧侶か。で、敵が僕達に何の用？」

そうカノンが、その僧侶を上から下まで見て、酷薄な笑みを浮かべた。

ちなみに背が少し低めのカノンよりも彼はもっと低い。

だが彼はカノンを逆に見上げて、馬鹿にしたように笑った。

「貴方はレオン様の一体なんですか？ 聞いた話によるとただの幼馴染だそうです」

「そうだ。それがどうかしたか？」

「ふーん、へー、それを信じろと？」

「そこまでしろ。カノンに酷い事を言うのは許さない」

そうレオンが割り込んできて、僧侶は大人しくなる。面倒な事になる気配を感じて、レオンはカノンの手を引いて足早にその場を立ち去ろうとすると、後ろから僧侶が声をかけた。

「その人、本当に魔物との混血ですか？」

機会の逃げ足は速い（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

ここのかせが治ったと思ったらまたかぜの繰り返しです。
皆様もおきよつけ下さい。

ちょっと更新が遅くなるかもです。

深く考えるな、意味はない

振り返るカノンとレオン。

その瞬間に、カノンが僧侶に押し倒された。

「「え？」」

間の抜けた声をレオンとカノンが同時にあげた。そして、そんなカノンと、次にレオンを僧侶が見上げてにたりと笑った。

「適当に言ったに決まっているじゃないですか☆」

そのまま一気にカノンの服の中に僧侶は手をつ突っ込んでそのまま、カノンをくすぐり始めた。

なまじ生命の危機に瀕していないので、対人スキルの低いカノンはどう対応すればいいのか分からない。とりあえずじたばた暴れつつ抗議の声を上げる。

「やめっ……ひっ……ひあっやあっ」

「ふふふ、よいではないかよいではないか♪」

僧侶は凄く楽しそうだ。そのくすぐり攻めはどんどん激しくなっていく。

加えて、カノンが凄く敏感だという事実をレオンは知る。

これは非常に重要な情報だ。そう、これは非常に重要な情報だ。

しかも、涙目になって息も荒げに顔を赤くしているのも中々よい。実によい。

そうレオンが、うむうむと頷いていると、

「レ……レオ……助け……ひあっ……ひあっ」

「もう一息かなあ？」

名前を呼ばれて、レオンは我に返った。

「……助けを呼ばれたから、やめてくれないか？」

「レオン様がそういうのであれば、仕方ないですね」

と、楽しそうに僧侶が笑ってくすぐるのを止めて離れる。くすぐられていないのに、カノンの体がびくんびくんと小刻みに

震えている。

落ち着かせようと、カノンが息を荒げに呼吸をしているのを見てレンは心配になる。

「大丈夫か、カノン？」

「ひゃんっ！」

「……………」

抱き起こそうとしただけで、エロイ声が出た気がする。いや、だって俺まだ何もしていないし、と思いつつレオンは再びカノンに触れる。

「ひっ！」

くすぐられ過ぎて感度が高くなっているらしい。どうしたものか、本当に……………」

襲おう。

お持ち帰りして美味しく頂いてしまおう。だってなんかこう凄くこう、可愛いではなくて、確かに可愛いんだけど、なんかもう良いかもって思うんだ。

「レオン……………顔が怖い……………」

「はっ、俺は今何を……………ぐふっ！」

引いたようにカノンが見上げていると、次にはレオンが呻くとカノンの上に倒れこむ。

「レオン、レオ……………え？」

僧侶がカノンに倒れこむ前にレオンの腕を引っ張りあげて、そのまま背負う。

ちなみに僧侶はカノンよりも背が低く非常に華奢である。

そのまま背負い込んで、一息ついてから僧侶はそのまま去ろうとした。だから、即座にカノンは飛び跳ねるように起き上がり、僧侶のフードを掴んだ。

「……………放して頂けませんか？ 僕は貴方に用はありません」

「散々くすぐっておいて、ただで逃がすと思うか？ 僕が。それに、レオンを返せ」

「……レオン様は後、ね。それに、貴方のものでは無いでしょう？」
呆れてものも言えないというように、溜息を付きながら振り返り
もせず僧侶が言う。

だから僧侶はカノンがどんな表情をしているのか見えなかった。

「それで？」

淡々とした声音。感情の無い、そんな言葉。僧侶もさすがにレオ
ンの事を気の毒に思う。恋敵とはいえ、レオンがカノンの事を好き
なのは一目瞭然なのに。

だから少し苛立ちながら僧侶は言い返した。

「よく堂々とそんな事が……」

そこで僧侶は言葉をとめる。思いの他近くにカノンの顔があった。
その顔は表情が消え失せ、ぞっとするほどに冷たく美しく見えた。
「手を出すな。殺すぞ？」

「……………」

カノンの金色の瞳が、魔物の瞳が煌々と輝く。声音も、体が氷の
塊になってしまったのではないかと感じるほどに冷たい。

命令されていると、僧侶は理解した。

これは一体なんだ？。威圧感、異質な、とても恐ろしい生き物に
遭遇してしまったような。

「もう一度言う、レオンに手を出すな」

その金色の瞳は、僧侶が今まで見た中で一番綺麗で恐ろしい。
逆らってはいけない。でも、この綺麗な生き物は何だ？。

僧侶はその声に従うように、レオンをカノンに渡すその時に、カ
ノンが”何”であるのかを知ろうと魔法かける。けれど、その魔法
はカノンが一笑すると共に消え失せる。

圧倒的な力量の差だ。それは、魔族との混血なのかを疑わせるほ
どに。

カノンが抱きしめたレオンに目を移すと、ふっと優しい笑みを浮
かべた。

その笑みがあまりにも澄んで柔らかくて優しげだから、僧侶は油

断してしまう。

レオンに魔法をかけて抱きかかえ、去ろうとするカノンに、やはりレオンを諦めきれない僧侶は手を延ばして肩を掴んだ。

その手は即座にカノンによって弾かれる。さらに、

「僕に触れるな、下種が！」

吐き捨てるように僧侶に言い切る。その目に宿る殺気は、次は無いと物語っている。

その恐ろしさに、僧侶は床にへたり込んでしまった。

本当に何なんだあれは。今まで出遭った魔族と全てにおいて違う。「やあ、僧侶、どうだった？」

先ほどの行動全てが、ホーリイロウの筋書き通りだった。レオンが僧侶は欲しかったので、協力するという趣旨のはずだったのだ。けれどこのような結果になってしまった。そして、ホーリイロウは失敗したというのにご機嫌なまま。

また彼の駒として働かせられた事に僧侶は溜息をつく。いつもの事だ。だからあえてそれを問いただすことはせず、

「……ホーリイロウ様。確かカノンが欲しいと言っていました、アレを？」

あんな恐ろしいものを欲しいと言う我が勇者を、僧侶は気が狂っていると思う。

けれど、ホーリイロウはそんな僧侶の言葉に、

「そうだよ。欲しいんだ」

「僕は、恐ろしいと思いました。あれは……」

「多くの勇者が望んで止まない果実だよ、禁断のね」

「は？」

時折、詩的な表現をする我が勇者に、僧侶はもっと分かりやすく言ってくれませんかと思っても口にしない。

以前戦士がそれを言って、しばらく部屋から出てこなくなった。さすがにそれを今されると困る。

適当に頷いて流す受け流しスキルが僧侶の中で着実に成長しつつ

あつた。

「はあ、そうですか。それよりも次はどうするのですか？」

「暫くレオン達を追い掛け回すことにした」

願ったり叶ったりの発言に、僧侶は喜びかけるもののあの怖い生き物を思い出して僧侶は素直に喜べない。そんな僧侶を見透かしたようにホーリイロウは笑いかけた。

「レオンという首輪があるから大丈夫だよ。彼がいる限りカノンは何も出来ない」

そう言われて納得する。確かにカノンはレオンという時は雰囲気が違う。

ただその言葉に安心を感じると同時に、僧侶には逆に悔しくも思えた。

負けてなるものかと、僧侶は心の中で誓ったのだった。

深く考えるな、意味はない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

辞書には何でも載っている

「あー、カノンちゃん、おはえりー」

イオが本当に楽しそうにけらけら笑っている。そしてトランは、イオの前で正座して黙々とお酒を飲んでいた。

「……何で戻ってきたらまた酔っているんだ？」

「赤ちゃんのお母さんが、お礼だってお酒も持ってきて来てくれたの。本当においしいようです。トランもそう思わない？」

「……うむ、酒さえあればどんな奴らでも倒せる気がする」

と頷く二人に、カノンは頭痛がした。とりあえず気絶したレオンをベッドに横にならせて、

「今回の依頼で当分は食いつないでいけそうだよ。でもなくて困るものでもないからこまめに稼いでおかないと」

「ふーん、じゃあそろそろ他の町に移動する？　ここの依頼、ホーリイロウ達が片っ端からクリアしちゃったから、あんまり良いの残ってないし」

「……なるほど、奴らを避けながらの方が美味しい依頼を手に入られると」

ちなみに、ホーリイロウ達はカノン達を追跡予定であるが、カノン達は知らない。そもそも、

「あの、僧侶って奴が気に入らない！」

面白そうな気配を感じて、イオがカノンに近寄ってきた。

「何があったの？　カノンちゃん」

「聞いて！　あいつ、僕の事をくすぐり放題くすぐったと思ったら、レオンを気絶させて連れ去ろうとした！」

「ふむふむ、それでカノンちゃんはどうしたの？」

「もちろん取り返してきたさ！　まったくレオンは油断しすぎ！」

「それでなんでカノンちゃんはそんなに機嫌が悪いの？」

「それは、”幼馴染”のレオンが連れ去られそうで、そんな弱いレ

オンが許せなくて……」

本当にあの僧侶は許せない。まさかレオンを連れて行こうとするなんて。

僕のレオンを。

そこまで考えてカノンは首をかしげた。

今、自分は何と考えた？。レオンはただ利用するだけで、でも良い奴だから好感は持ってて、優しいし、真面目な顔してればカッコイイし、たまに犬みたいに懐いて来てそれも嬉しいし。

なるほど、ペットに対する愛情と同じか？。そうか、僕はレオンをペットにしたいのか。

でも人間だし、動物と同じようには無理だよな？……どうしよう。

「……カノンちゃん、何か変な事考えているでしょう？」

「そんな事無い！ 真面目に考えていただけだ！」

イオは、真面目に考えてキス百回すると子供が出来るとか言っていたんじゃないかと思ったけれど、黙った。とりあえず今は生暖かく見守ろう。”仲間”として。

そこで、カノンの手に古ぼけた本が一冊ある事にイオは気づく。

「カノンちゃん、その本は？」

「辞書だよ。古本屋で買ってきたんだ。安かったから」

「何でまた……魔道書とかの方が良いんじゃない？」

「……この前の事といい性の知識が僕には足りていない。だから辞書を見て勉強する事にした！」

「あ、うん。確かに辞書にはエッチな言葉とか載っているもんね」

「でしょ？ これでもうレオンに馬鹿にされないぞ！ 最後までの意味を、絶対調べてやる！」

その情熱は素晴らしいとイオは思ったが、そもそもそれ系の大人の本を見れば一発なのではないかと思う。

あ、そういう本があること自体知らないのか。なるほどなるほど……本当に箱入りだな、オイ。

などと、イオが思っている事も知らず、意気揚々とカノンは辞書

を調べ始める。

だが、相手をしてもらえないのも酔っ払ったイオはつまらない。もくもくと酒を飲んでいるトランを見ているのも楽しいのだが、先ほどカノンと話している途中許容量を超えたらしく倒れて泥酔している。

「そういえば素直にくすぐられるなんて、カノンちゃん、珍しいね」
「……敵意が無かったから」

「ほう、良い事聞いちゃった♪」

にまーと笑うイオに、カノンは身の危険を感じる。そもそも酔っ払いと関わって良い事があったためしがない。この前は樽に突っ込まれたし。

「ま、待って、まず話を……」

「問答無用、てい！ ふふ、カノンちゃんてあったかい」

「やめ！ 抱きつくな！ 放せ！」

「酷い！ そうだね、カノンちゃんこんなに抱き心地が良いものね」

「文章が明らかにおかしい！ 僕に抱きつく前に寝ろ！」

「やーん、カノンちゃんのいけずー、と見せかけてすりすりすり」

「ふえ！ ちょ、そんなとこ触らないで！ ふえ、ひん！」

イオがふにゃふにゃ笑いながら顔をこすり付けてくるのを引き剥がそうと、カノンは懸命にがんばっていると視線を感じた。

見るとレオンが真剣な表情で二人を見ている。それにイオが気付いて、

「良い仕事しているでしょう？」

「ありがとうございます。しばらくおかず無しで大丈夫です」

「二人とも訳の分からない事言っていないで、レオン、助け……」

「レオンも混ざる？」

面白そうにイオが誘う。それにすぐさまレオンは頷こうとした。しかし、じろりとカノンに睨まれて、レオンは固まった。そんなレオンを見て、イオが本当に面白そうに、

「じゃあ、カノンちゃん、レオンをからかってみる？」

「え？　どんな風に？」

耳貸してと言って、カノンが耳を近づけると小声で耳打ちした。

レオンは嫌な予感がした。

カノンがレオンを見て、悪戯っぽく笑う。

「レオンの事は遊びだったんだ」

レオンは、先ほども固まって、真剣にイオに言った。

「イオ、言わせて良いことと悪い事がある」

「おや、レオン怒っちゃった。こういう時はお酒を、カノンに飲ま

……くう」

イオが立ち上がったと思ったら、ベッドに倒れこんだ。いい加減酔いが回ったらしい。

ようやく開放されたカノンが、起き上がってほっと一息を付いて、次の瞬間悲鳴を上げた。

「僕の辞書が……濡れて……ああ、もう中の文字が見えない……」

水差しに浸されて、辞書が大変な事になっていた。うっうつと泣くカノンに、レオンはにこやかに笑って、

「ははは、残念だったなカノン」

「レオン、まさかわざと?!」

「さあ、どうだろうね、と、はは、当らんぞ！」

カノンが杖を振り回すと、レオンがそれをひらりとかわす。そうしばらくして、二人とも疲れてしまいその日は寝てしまったのだった。

辞書には何でも載っている（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしく願いいたします

引いた時点でお前は負けだ

「何でジュース1本が500リンもするんだ！ 適正価格ってあるだろう！」

「はいはい、カノンちゃんどいてね。……おじさん、2リンでどう？」

「いいよ」

あつさりと値引きをしたおじさんを見て、カノンは啞然とする。何だこれ。

カノンが目を白黒させているのが面白いのか、イオは先ほど買ったジュースをカノンに一つ渡す。

釈然としないながらも受け取り、席に着き、その飲み物に口をつけると優しい甘さが広がった。

町の一角の喫茶店。飲みものをカウンターに買いに行ったカノンが凍り付いているのを察して、イオが助け舟を出してくれた。というか、

「……なんで？」

「うん、もっと値切れたっぽかったね。それともカノンちゃんが可愛いからおまけしてくれたのかな？」

「いや、そうではなく、何であんな値段に？」

「ああ、カノンちゃん知らないんだっけ。この町、フリーエの町は商人の町でね。大抵、一番初めに吹っかけてきて、それを何処まで値切れるかという、そういう町なんだ」

「だから500リン？」

「そう、値切られる事前提。何も言わなければ店はぼろ儲け。他の町は商品についた値段をそのまま買うでしょう？ だから初めてでこの町の文化知らなくて、多くの場合、相手の言い値で買ってしまいうか、話もせず怒って拒否して帰っちゃったりするんだ」

「それじゃあ駄目なんだ。なるほど、だから値引き交渉を……」

「うん。それに初めにすごい値段にしておく、普通の値段でも安く思えるでしょう？」

賢い町だとカノンは思う。

それに商人の町というだけあって色々な物も売っているし、何より先ほどイオに買ってきてもらい食べた果物も美味しかった。本当によそ見しすぎて危なくイオとはぐれる所だったのだが。

現在新しい町に来て、イオとカノン、レオンとトランの二組に分かれて、買い物をしている最中だった。

カノン達は、簡単な装備で、レオン達は少し重めの装備が必要なので二つに分かれたのだが。

「は！ レオンがまた何かアホことをやっている気がする！」

「カノンちゃん、本当にレオンの事が好きだね」

「な！ イオ、そんな事……」

「”幼馴染”として大好きなんだよね！」

にまにま笑うイオにカノンは嵌められたと思った。そして、ぶすつとして、

「イオはトランの事はどうなの？ 好きなの？」

「好きだよ、性的な意味で」

ここまであっさりと言われると、カノンは更に仕返しと思える言葉が浮かばない。

悔しくなって、むーと唸りながらジュースに口をつける。

本当にカノンには分からないのだ。確かにレオンといっていると居心地がいい……のか？。

色々と今までの所業を思い出して、カノンは何故このパーティにいるのだろうかと再度悩みかける。

それでも、レオンはいい奴で。もう少しだけ一緒にいても良いとカノンには思えてしまう。

そんなカノンをイオは面白そうに眺めていたのだった。

「何とこの鏡、好きな相手を映してある言葉を唱えたら不思議

！好きな人の色々なエロイ姿が！」

山盛りの人ばかり。全員男ばかりだが、そもそも全人口で女性の割合が少ないのだがそれを最前目に見てもアレである。

「おい、トラン、これは買いだよな」

「そうだな、レオン。これを買わねば男ではない」

今なら可愛いお守りも付けて、いちきゅっぱのー、と話をしているおじさんに、これ買いますとレオン達は告げたのだった。

「で、それで装備はこれだけしか買えなかったと」

「お許しくださいカノン様。ほんの出来心だったのでございます」

「ささやかな夢を買ったのでございます」

「僕、まさかトランにまで正座でお説教する事になるとは思わなかったよ」

ふふふと顔はにこやかなのに、どす黒い怒りの雰囲気をかもし出しながらカノンは仁王立ちになっている。

そして一時間が経過した頃。

「カノンちゃん、そろそろ休憩したらどうかな」

「とりあえず、トランは開放。レオンは追加だ」

「何で！」

「気に入らないから！ まったく無差別にそんな……」

「カノンだって興味は無いのか！ ちょっと魅力的だなんて子のエロイ姿！」

言われて、レオンのが見てみたいな、とか頭に浮かんだものの、何でレオンのものが見たいんだ僕は、とカノンは打ち消した。

そもそもレオンは目移りしすぎて良くない。まったくレオンは僕だけを見ていれば良いのに。

”幼馴染”なんだから。

と、そこでトランが悲鳴を上げた。

「な、何ということだ！ く、こんな事って……」

「カノンちゃん、これにただの鏡みたい」

そこでレオンが悲鳴を上げた。

「そんな！ 俺の夢が！」

「レオンもそんな悲痛な顔をしないで。僕も残念だけれど、出店によくあるんだ、こう実際買ってみると……て」

「く、明日店主に……」

「明日は、僕と一緒に防具買いに行こうね、レオン」

にっこりと笑うカノンがレオンの肩を叩いた。そんなの探すよりも、まずは防具だ。

だってレオンは弱いからだから。

それを見て、イオが、じゃあ明日はトラン、一緒に買い物に行こうねと誘っていた。

ちなみに嘆きつつも、レオンがにやりと笑っていたのをカノンは気づきもしなかった。

そんなこんなで、レオンは目を放したら駄目だ、買い物でも、とカノンは学習したのだった。

引いた時点でお前は負けだ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

誤解ですか、うふふ

「カノンちゃん、レオンをそんなにロープでぐるぐる巻きにしてどうするの？」

「寝たふりをして様子を見ていたら、早起きして逃げようとしやがりましたので」

「うーん、縄抜けされたら終わりなんじゃない？」

「……レオン、縄抜けとか出来たりする？」

「ふ、俺の辞書に不可能という文字は無い」

「欠陥品の辞書の話は良いとして、出来るの？」

「見よ！この華麗なる技！」

しゅるんと縄から抜け出るレオンを見て、そしてそんな自慢げなレオンを見て、カノンはレオンの手を握った。

「え？」

「この前服を掴んでいたら逃げられたから、手を握る事にした。こうしていけば逃げられないでしょ？」

「え、あ、うん。ソウデスネ」

「レオン、良かったね」

まったくレオンには困ったものだ。やっぱり僕が付いていないといけないらしいと、カノンは嘆息する。

そんな二人の様子を、イオがにまにまと笑ってみていたのだった。

「じゃあ、僕達も手を繋ごうか、トラン」

「うむ」

そんなイオとトランと別れて、防具屋へ。

「えーとこれとかこれは？　これぐらいで……」

店員と交渉していると、ちらちらと客がカノン達の方を見てくる。なんだろうと思っていると、小さい声で誰かが舌打ちして、

「ち、アベックで買い物に来るなよ」

え？、誰がアベッグ？、いや、そういえば恋人同士は手を繋ぐもので、今カノンはレオンと手を繋いでいて、いや、だって逃げないようにしているだけだから。

これでお願いますと、防具を買って、慌てて外に出る。

「カノン、どうしたんだ？」

「防具を買ったから、もう手を離してもいいよね。レオンも好きにしているよ」

「じゃあ、俺はもう少しカノンと手を繋いでる」

「何故！」

だって、それでは本当に恋人同士みたいではないか。カノンとレオンが恋人同士。カノンはそう考えると胸の鼓動が速くなり、頬が熱くなる。

「カノン、顔が赤いぞ？」

「だ、だって手を繋ぐなんて……」

「昔は繋いでいたじゃないか。子供の時。”幼馴染”なんだからおかしくないだろう？」

言われて、そうかもとカノンは思った。友達と手を繋ぐ事は良くある事だ。

「そ、そう言われてみれば、そうかも」

「何だカノン、恋人同士に見られるかもって思ったのか？」

「う、それは」

「言わせたい奴には言わせておけばいいさ。それに手を繋いでいれば、はぐれる心配も無いだろう？」

レオンのくせに、もっともな事を言うとかノンは少しむくれる。そんなカノンをレオンが引っ張る。

「せっかくだから名所を見に行こう。それくらいは良いだろう？」

「……帰りにギルドによって、依頼を探すから、それを忘れなければ別に……」

「ようし、そうと決まれば俺、がんばる！」

「何をだ！」

そんな話を話しながら、カノンはレオンに手を惹かれて走り出したのだった。

綺麗な花畑が広がっている。確かに美しいし、それを見るのはカノンも好きだ。だが、

「何でそこら中でいちゃいちゃと……」

カノンは彼らを見て、頭が痛くなる。あと人前でキスをするな。もっと慎重深さを持って。

そんなカノンを見てレオンが、

「いや、名所ってそういうものだから」

「……二人つきりになれる所が良い」

「え？」

「あいつら目障りだから、静かな所に行きたい」

仕方が無いなど、レオンに手を引かれたその場所は本当に人は居なくて、花畑が一望できる場所だった。

「カノン」

名前を呼ばれて振り返ると、レオンの手に一輪の花があって、その花をカノンの髪にさした。

「綺麗だよ、カノン」

「な！」

そんな事を言ってレオンが優しく微笑むから、カノンは顔を真っ赤にしてしまう。

そのままカノンの髪にレオンが触れて、カノンは急いで逃げ出した。

けれど手を握ったままだから、すぐ引き寄せられて、カノンは何にが何だか分からなくなる。

顔が熱くて頭がぐるぐるして、まともにレオンの顔が見られない。

「どこにも行くなよ？」

「え？」

「消え入りそうに綺麗だったから、不安になった」

「……もう、ギルドに行こう。やっぱり早めのほうがいい依頼があると思うから」

「カノンがそういうならそうかもな」

レオンがすぐに納得したように頷く。だからカノンはほっとした。自分は魔王だから、いずれレオンの前に敵として現れるだろう。けれどそのとき自分は本当に……カノンは、小さく溜息をついたのだった。

「以前来られませんでしたか？ あ、その人は赤い目でしたね」
カノンを見た受付の人が、そんな事を言うのでカノンは心の中で思った。

自分みたいなのは、引きこもりになっている父様くらいだろう。失礼な。

そして依頼が一つ。

「泉の水を汲んでくるだけで、1500リン？」

破格の値段だが、この程度ならば大丈夫だろうと受けることにした。そして、

「そういえばレオン、新しい技、どうする気だ？」

「もう決めた」

「……聞いている？」

「見てのお楽しみだ」

即座にその技を忘れさせようとするカノンとレオンの攻防は、宿に着くまで続けられたのだった。

誤解ですか、うふふ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

しょくしゅには氣よ付けろ

泉の水を汲みに、カノン達はどうしてこんなに依頼料が素敵な事になっていたのか分かった。

「つる系の魔物か」

カノンも先ほど杖を取り上げられそうになり苦戦した。だから触れればすぐに炎系の魔法で燃やしているのだが。

うによりよと蠢く緑の蔓がかなり広範囲に広がっていて、時に触手のように攻撃をしてきて倒しても倒してもきりが無い。

一点に集中して突破することも考えられるが、泉に着く前に触手に囲まれてしまう事だろう。

魔王としてであれば、容易にこれを突破できるのだが、さてどうしたものかとカノンが考えていると、

「カノン、ごめん」

「へっ?……わああああ」

いきなりレオンにカノンは蔓の中に放り込まれた。

先ほどから捕らえようと蔓を伸ばしてくるだけなので、特に実害は無いと言えそうなのだが。

ずるりとカノンの触れた辺りの蔓が動く。

嫌な予感がしてカノンはそこから離れようとすると、まずその動きを抑えようとするかのようにカノンの手に絡みつく。

「放せ! やめっ! レオン、見てないで……ひんっ」

腰の辺りに蔓が絡み付いて、そのままカノンの服の中に蔓が潜り込む。

肌に直接蔓の冷たい感触を感じて、カノンは鳥肌が立ちびくつきと大きく弛緩する。

この、下等な魔物の癖にこの僕に触れようとするなんて、という怒りと、何でレオンはこんな事をカノンがされると分かっているのに放り込んだのかと悲しくなる。

更に数本の蔓がカノンに触れようと近づいた所で、

「よし、今だ！」

一斉にレオン達は攻撃を開始したのだった。

「あのタイプの魔物は餌を捕らえると、本体がそこに近づいて来るんだ」

レオンが何処か得意げである。加えて、カノンの衣服が乱されて、ちよつとエロく見えるのでよっしゃあと思っていたりする。

だがそんなカノンは、非常に機嫌が悪い。そしてまだ蔓の魔物は沢山いる。ので、

「そうかそうか。こ・ん・ど・は、お前がいけー！」

「や、ちよつ、うわああああ」

レオンがカノンによつて蔓に放り込まれた。

だが、今度は蔓の魔物の方が嫌だと言うかのように身を引いた。

それに何かレオンは思う所があるらしく、手を近づけると蔓の魔物が逃げていく。

「傷つくわー」

「それは僕の台詞だよ。何で僕はいいのにレオンは駄目なんだ。ちよつとは楽しみ……じゃなかった、レオンにお仕置き……じゃ無くて、どうでもいいっか」

「カノン酷い！　こんないたいけな”幼馴染”に！」

「誰がだ！　だとしたら僕だって”幼馴染”だろ？」

「カノンはいいんだ！　俺が見たかったから！」

よし、少し再教育だ。レオンの体にたつぷりと染み入るように僕の思いを……。

「カノンちゃん、あのタイプの魔物は、受けが専門と攻めが専門がいるんだよー」

「イオ、という事は、攻め専門の魔物を……というか、レオンで攻め？」

「「「……………」」」」

「そもそも何で僕が受けなんだ。攻めだっただけじゃないか」

「カノンちゃん、現実には残酷だけれど気を確かに持って」

「イオ、言っている事がよく分からない！ 僕は男だ！」

「ああ可愛い、本当に可愛いよカノンちゃん！」

「抱きしめて頭でなでないでよイオ！ むー！」

「そうだぞイオ！ そんな羨ましい事！」

「あれ、レオンもしたいの？ どうする、カノンちゃん？」

楽しそうなイオの声。そしてレオンに抱きしめられると聞いた瞬間、カノンはなんて事を言うんだイオを見た。一方レオンは、

「え？、俺に抱きしめられて頭撫でられたいのか、カノン」

と、情緒とか、顔を赤らめるとか何も無い。それがカノンには本当に悔しくて悔しくて悔しくて……。

呪文を唱えて、一匹蔓の魔物をしとめた。

「……カノンちゃん、怒ってる？」

「何が？」

冷たくイオに答えると、怖い、とイオはカノンを放した。

そして、そこで異変が起きる。

蔓の魔物達が道を開ける。そして何処かへとずるずると去っていく。

「……何が起こったんだ？ こちらには都合がいいが……カノン？」
「……………」

カノンはいなくなった魔物の方角をじっと見つめる。

その魔力の気配は懐かしいもので、というか、父のものだ。

引き籠もり気味の父が出て来たという事から、あいつも居るのは間違いないとして。

いや、だいつつ嫌いなあいつが父を守らなければどうなるか不安で仕方ないから良いのだが。

非常に不本意だが。

——でも、今回は助かったかな。

実の所、既に町に戻ることが出来ないほどに蔓の魔物に囲まれて

いてどうしようかと思っていたのだ。

広範囲から狭められて気付かなかった。力を抑えているのが災いしたか。

それにその事をレオン達に話せばなんで分かるのかは誤魔化せるにしても、もしそれをどうにかしようとしたなら……力を隠していたこと、ひいては何故そんなに強いのかという点から記憶操作が解けてしまうかもしれない。

もしそうなったなら、”仲間”全員が敵に回る。罵倒され、カノンを殺そうと襲い掛かるだろう。

——レオンに憎しみの籠った目で見られて、剣を向けられる……そんなの、嫌だ。それに、イオにトランだって短い間だけれど一緒にいて、もっと僕はここにいたいと思った。

確かに魔王と襲った時はただ利用するためだけのつもりだったのに、確かにあの時はそんな目で見られても何とも思わなかったのに、今は、少しでも長くその時が来なければいいとカノンは思ってしまう。

戸惑うような仲間達。そこでイオが、

「んー、なんか変な気配を感じる……カノンちゃんは何？」

「僕は良く分からない。でも、これで依頼は簡単にこなせそうだね」

「……そうだね。じゃあ、急ごうか」

そう、にっこり笑うイオが、カノンに見えない位置でレオンとトランに目配せするのをカノンは気づきもしなかった。

しょくしゅには氣よ付けろ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、クリスマスに出来たらなと思っています。
よろしくお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618z/>

戦う魔王様!?

2011年12月19日21時51分発行